

前編

「陽子、愛してるぞ陽子、よく戻ってきてくれたな」

「もう、あたしは陽子じゃなく周子なのに、おとーちゃんいつまで寝ぼけてんの？」

「ずっと寂しかったんだぞ陽子！ もう離さないからな」

「だから～～」

アイドルを引退してから二年。二十三歳になった塩見周子は元プロデューサーと結婚した。全国のファンから愛されるアイドルという存在から、たったひとりの旦那様に愛してもらう人妻への転身。華やかな芸能界への未練はこれっぽっちもなかった。

プロデューサーに支えてもらうアイドルから、今後はプロデューサーを支える良妻になるんだと周子は決めていた。

その彼女が今、プロデューサーとの愛の巣で男に押し倒され、抱きつかれている。

男の正体はプロデューサーの父で周子からすると義父。若いころ妻が男を作って蒸発。以後は男手ひとつでプロデューサーを育ててきた。年齢は五十代だが長身かつ肉体労働を長くしてきたため筋肉質でガッチリした身体をしていた。

結婚当初は別居していたものの、義父が身体を悪くして休職したことを機に、親孝行したいプロデューサーが周子に同居の話を持ちかけた。

周子はプロデューサーのお父さんならと一も二もなく同意した。

「おとーちゃん堪忍して。そんな大きい身体で押し掛かれたら苦しいから。酔ってるならお布団で寝ながら待っとき、お水持ってきたげる」

そう声をかけて周子は義父の下から這い抜けようとする。しかし、彼の手にぎゅうぎゅう抱きしめられ身動き取れなくされてしまう。ただでさえ男女の筋力差があるうえ、義父は屈強な体格の持ち主。腕力に物を言わされたら周子が太刀打ちできるはずもない。

「そうやってまたワシから逃げようとするんだな陽子。今度は絶対に逃さないからな。あんな男がなんだ。ワシのほうか陽子を愛しとるんだぞ」

「ちょ……痛いって、堪忍してよ！」

「うるさい、おとなしくするんだ。今度こそ二度とどこへも行かせんぞ。もう二度と離さんからな」

周子は両手首を義父の手に掴まれる。彼の大きく力強い片手で周子の両腕を難なく拘束した。周子はバンザイするように両腕を頭上でまとも

られてしまう。さらに体重をかけて抵抗を封じてくる。この体格差では逃れようがなかった。

(あかん、ほんまに逃げられへん)

圧倒的な力の差。抵抗しても無駄なんだぞ万の言葉よりも分からせられる。

周子から見て義父は可愛い熊さんのような存在だった。大きな身体に不釣り合いなほどつぶらな瞳、仕事を休んでから運動不足で腹が弛んできたと言って腹部をポンポン叩く動きも動物園で見た熊さんのようだった。

だけど熊は大人しく、可愛く見えても熊。ひとたび牙を剥かれれば人間が敵う相手ではない。現に今の周子は、まったく身動きできない。義父はそれほど力を込めて押さえつけてるように見えないのにだ。その気になれば彼はいつでも自分を犯せるのだと分かってしまう。

「や……やめて、離して、いややっ……あたしは、おとーちゃんが別れた奥さんじゃないんだよ、人違いでこんなこと……」

震える声で懇願する周子の言葉も義父の耳には届かない。

「あの男にはもう指一本触れさせん。誰にも渡さないぞ。陽子、お前は永遠にワシだけのものだ」

不意に義父の顔が近づいてきて唇を塞がれた。強引に舌がねじ込まれる。唾液を流し込まれて飲まされる。アルコール臭いキスだった。

周子は顔を背けて抵抗するが、顎を捕まれて無理やり正面を向かされ再び唇を奪われる。口の中を舌で蹂躪された。逃げ惑う周子の舌は程なくして義父の舌に絡め取られた。

「ぶはっ！ お、おとーちゃん何するん？」

唇が離れた瞬間に周子は抗議の声を上げる。

「口答えするな。今度こそワシのほうが、あんな男より陽子を幸せにしてやれると証明するんだ」

職場でお世話になった人と久しぶりに飲んでくると言っておかけた義父は、よほど楽しい酒宴だったのか周子が見たこともないくらい泥酔して帰ってきた。普段は若い息子嫁の前で醜態をさらさないようセーブしていたのかもしれない。

べろんべろんになって帰宅した義父は周子の肩を借り寝室までやって来た。そこで彼は酔いから周子を、自分と息子を捨てて何年も前に蒸発した元妻と誤認した。そのまま畳に押し倒されてしまったのだった。

「やだ、待っておとーちゃんっ」

義父の手が部屋着にしていたトレーナーの裾から侵入してくる。ブラジャー越しにプロデューサー以外の男に胸を揉まれた。大きな手が乳房全体を包み込み優しく撫で回してくる。

酔った勢いで力任せにされたらどうしようと恐怖したが、予想と違い義父の愛撫は丁寧でねちっこい系だった。その愛撫の巧みさが周子に別種の恐怖心を抱かせる。

「んっ、んんっ、やめ……あっ……だめえっ……」

義父の指が乳首に触れると甘い声が漏れてしまう。慌てて口を噤むが遅かった。一度漏れてしまった声は堰を切ったように止まらなくなる。

「ああっ、あんっ、そこお……ダメええ」

執拗に乳首を責められるうちに喘ぎ声が止められなくなってしまった。

周子は身をよじり、なんとか逃げようともがいた。しかし、そのたびに義父の手により動きを封じられる。彼は単に上から覆い被さるだけでなく、周子の動きを読み先回りした。まるで柔道の試合のように一方的に抑え込まれてしまう。

そして周子はいつの間にかズボンを脱がされていた。

「ちょっと待って、おとーちゃん！ それはダメ、そこは本当にあかんよ」

脚を閉じて抵抗しようとするが義父は細っこい周子の脚力など意に介さない。あっという間にパンツも剥ぎ取られて下半身丸出しにされた。足の間に割って入られた状態では閉じることも叶わない。

両足を開かされると股間を義父に凝視されてしまう。そこは既に潤っていた。陰毛は愛液で濡れそぼって肌に張り付き、秘裂からは透明な粘液が溢れている。ひくつく膣穴の入り口を指先でなぞられるとそれだけで感じてしまい、さらに蜜液を分泌してしまう。

(こんなことになるなんて)

まだ触れられてもいないのにここまで感じてしまう自分が信じられなかった。しかも相手は義理の父親。それなのにどうしてこんなに興奮しているのか、自分でも分からなかった。

(どうして、あたしこんなに濡れてるん?)

戸惑いながら自問する周子の疑問に答える者はいない。だから周子は自分自身で答えを出した。

(あの人が触ってくれないから……お仕事が忙しいのは分かってるけど、もう少し夫婦らしい生活をしてれば、おとーちゃん相手に濡れたりせーへんのに)

周子をトップアイドルまで育てた実績は、プロデューサーのキャリアを大きく前進させた。任せられる仕事の量は増え、与えられる裁量も大きくなった。そのため仕事は多忙を極めた。

皮肉にも周子の成功が彼女とプロデューサーのすれ違いを生み出したのだ。しかも担当アイドルとプロデューサーの関係でなくなったふたりには家庭以外での接点がない。家にろくすっぽ帰ってこなくなったプロデューサーとは一緒に過ごす時間が減り、セックスレスに陥ってしまった。

周子は自慰で性欲を発散するしかなくなってしまったが、それも限界があった。元アイドルと言えどやりたい盛りの女。たまに何もかも忘れ極太パイプでズボズボしたい夜だってある。だけど義父と同居しては、ケダモノのようなおほ声オナニーに興じることもできない。

声を殺し、大人しく浅瀬を自分の指で弄りながら、身体をビクビク震わせてイクのが精一杯だ。それが不満となって余計に身体を疼かせた。

そんな状態が長く続いたせいで、周子の身体は無意識に雄を求める万年発情状態になってしまったのである。それもオナニー中ずっと想像していた、おっきくて遅いおちんちんを膣奥まで挿し込み、情熱的に抱き潰してもらえるような強い男の人とのセックスに飢えていた。

周子が義父に胸を揉まれながら感じた恐怖とは言い換えれば、目の前にいるセックスしちゃいけない男の人が、自分の求める抱いてもらいたい男の人の条件を満たしてしまっていること——ここで抱かれたら、この人とのセックスにハマっちゃうかもしれない予感だった。

(絶対セックスしちゃいけない男の人なのに……義理のおとちゃんなのに、あの人の本物のお父さんなのに……)

そう思えば思うほど背徳感が興奮のスパイスになる。いけないシューコちゃんの面が煽られる。

欲望や好奇心に負けちゃダメだと静止する理性とは裏腹に、身体は素直に反応してしまう。胸を弄られているだけで気持ちよくなってしまおうし、股ぐらから溢れた愛液で太腿の内側までびしょりと濡らしてしまっていた。

(ダメだって、このまま流されたら)

なし崩しで最後までされてしまったら、もう取り返しがつかない。後戻りできなくなるだろうことは容易に想像できた。それだけは避けたかった。

(何とかしなきゃ)

そう思っても力が入らない。そもそも腕力で敵わない上に組み伏せられては何もできなかった。

それでも周子は諦めなかった。どうにかしなければと頭をフル回転させる。

ふと思いついたアイデアを実行しようと試みる。義父の肩に手をかけ押し返すのではなく逆に自分のほうから抱きついたのだ。すると驚いた彼の動きが一瞬止まった。これは使えると思い周子は更に密着するように身体を押し付けた。ちょうど彼におっぱいを押し当てるような格好だ。

そのまま腰をくねらせて誘うように動く。彼の腰に両脚を巻きつけてホールドした。

「お願い、これ以上やったらあかんの。こんなことしたらダメなんは、おとーちゃんも分かるやろ。おとーちゃんのこと嫌いなわけじゃないけど、やっぱりこういうのは本物の夫婦同士じゃないとね」

「本物じゃない……」

「うん、おとーちゃんには悪いけど、あたしはもう他の男の人と結婚してるから」

「ワシよりアイツのほうがいいのか」

「もちろん。あたしの旦那さんだもーん」

「陽子、お前……」

不意に義父の手が離れた。拘束を解かれたのだと思った瞬間、トレーナーを剥ぎ取られた。目の前が暗くなったかと思うと、次に視界が開けた時はトレーナーから頭が抜け、両腕に絡みついている。

上半身は完全に裸になった。ブラジャーを押し上げられ胸が露わになる。白く透き通った乳房の先端はすでにツンと硬く尖っていた。剥き出しになった胸に義父が吸い付く。乳首を舐められるとくすぐったかった。

乳首だけではなく乳輪ごと口を含み吸われたりもした。口の中で舌を使って激しく舐られるたびに背筋がぞくぞく震える。

「んっ……あ、ああっ、やあっ」

乳首への刺激に周子は思わず声を上げてしまう。彼女の声に気をよくしたのか義父はさらに強く乳首を吸い上げる。舌先で乳首を転がされ甘噛みされた。反対側の胸も手で揉みほぐされる。指の間に乳首を挟み込んでクニクニ捏ねられると甘い痺れが広がった。

「ふああっ、んくううっ……う、うう……あっ、ああんっ！ おとー

ちゃん♡ そこ、そんな風にしたらダメえ……♡」

義父の愛撫に翻弄されてしまう。自分で触る時よりも何倍も気持ちいい。認めたくないけどプロデューサーよりも上手い。

(どうしよう、これ、すごいかも)

次第に頭の中がピンク色になっていくのが分かった。身体の芯が熱くなり股間の奥がキュンとする。この感覚が快感なのだと思った時にはもう手遅れだった。

(こんなの知らないっ、こんなの気持ちよすぎる)

頭の中で警鐘が鳴る。このままだと危ないと分かっているけども快楽に抗うことはできなかった。

(ダメっ、このままじゃイカされてしまう)

だが絶頂に達する寸前で義父は動きを止めてしまった。中途半端に高められた身体が疼く。あと少しだったのにという残念さが募る一方、安堵している自分もいた。あのまま続けられていたらどうなってしまったのだろうか？

(危なかった一、あとちょっとでおと一ちゃんにイカされてまうところだった)

もしイッてしまっていれば間違いなく堕ちていた。一度でも義父の手でイッてしまえば忘れられなくなる。

「本物じゃないなんて言うなよ陽子。ワシらは永遠の愛を誓った仲じゃないか」

「だから、あたしはシューコちゃんで陽子さんじゃないって」

未だ酔いが醒めない義父は頑なだ。自分が一度こうと決めたら他人の説得には耳を貸さない。先程は拒んでいた相手が逆に抱きついてくるという不意打ちで時間を作ったが、同じ手は二度通用しないだろう。

「分かっているぞ陽子。俺が忙しさにかまけて家庭を疎かにしたから——抱いてやらなかったから他の男に走ったんだろ、あれからワシも反省したんだ。やはり夫婦は愛の通った濃厚なセックスをしないと」

そう言って義父は周子の目の前でパンツごとズボンを下ろした。現れたのは太くて長い男根だった。亀頭が露出して先走りに濡れていた。血管の浮き出た赤黒い陰茎は、グロテスクではあるが何故か目が離せないほど魅力的に見えた。

(なにあれ……あんな大きいの初めて見た)

周子が知ってる男根はプロデューサーのもの一本。アイドル時代は綺羅

星の如く輝く芸能人や、女の身体を金で買おうとする枕営業狙いのヒビ爺どもからひっきりなしに誘われた。しかし一度だって周子はプロデューサー以外の男に靡かなかった。

ゆえに塩見周子は旦那様以外のちんぽを知らない。

初めて見る夫以外の生殖器に目を奪われる。その大きさに圧倒されると同時に興奮を覚えた。心臓がドキドキする。鼓動の音が耳にうるさいくらい響いた。

アレが自分の中に入ってくることを想像すると、はしたなくも周子は膣キュンして蜜液が溢れてくるのを感じた。まるでこれからされることを待ち望んでいるかのように。

(だめ、あの人を裏切るわけには……あの人だけなんだから……あたしがエッチしていい男の人は)

心ではそう思っても身体は正直だ。早く挿れて欲しくてたまらなかった。今まで我慢してきた反動だろうか、目の前の肉棒にむしゃぶりつきたくて仕方がないのだ。

(ああ、欲しい、あれが、あのおっきいのでおまんこぐちゃぐちゃにしてもらえたらどんなに気持ちええんやろ)

想像してしまったことでますます欲しくなった。下腹部が疼いて止まらない。子宮が降りてきて精子を求めて降りてくるのが分かる。雄の子種を受け入れる準備をしているのだ。

まだ挿れられてもないのにと驚く周子を余所に義父は、暴発寸前の陰莖を義娘の秘裂に押し当ててきた。くちゅりと音を立てて先端部が割れ目に触れる。それだけで背筋に電流が走ったような衝撃に襲われた。軽く達してしまいそうになるほどの快感に襲われる。

「ひゃうん♡」

自分でも信じられないような甘ったるい声が口から漏れた。慌てて口を噤んだがもう遅い。

「陽子、今の声はなんだ？」

「いや、これは……」

恥ずかしい声を聞かれてしまい羞恥のあまり顔が真っ赤になる。そんな自分の反応を見て義父はニヤリと笑った。獲物を見つけた肉食獣のような笑みだった。嫌な予感を覚える間もなく彼は腰を突き入れてきた。固く閉じたままの花弁を押し開きながら剛直が挿入されていく。

「くっ、んんっ、あうっ、痛っ！」

久しぶりのセックス。女の指よりも太いものが侵入してくる。狭い膈内を押し広げられる異物感に周子は呻く。

「うぐうっ、あううう……」

自分を女にしたプロデューサーのペニスより、さらに一回り以上大きな義父のおちんぼが、ゆっくり他の男との違いを見せつけるかの如く入ってくる。カリ首が襞を掻き分けながら奥へと進んでいく。

「全部入ったぞ、分かるか」

「はあ、はあっ……え？」

言われて初めて気づいた。あれだけ大きくて苦しかったはずのそれがすっぱり収まっている。

一番深いところまで届くとそこで一旦止まった。

義父はそのまま動こうとしなかった。代わりに両手を胸に伸ばし乳首を摘んできた。優しく労るように撫で回される。円を描くようにこねくり回す手付きは、やはり繊細で優しい。痛みはなくむしろ心地よかった。彼の手の動きに合わせて胸の膨らみが小さく弾んだ。周子は知らずのうちに甘い吐息を漏らしていた。

そんな反応を見逃さなかった義父は、両手で乳房を弄び始めた。五本の指を巧みに操って乳房全体を撫で回し揉みほぐす。時折人差し指や中指で乳頭を弾くように刺激する。その度にピリッとした甘い痺れが走るのだが、決して嫌な感じはしなかった。もっとして欲しいと思ってしまうほど気持ちよかった。

「ふあああっ♡ や、あっ、気持ち、いい♡ おとーちゃんほんまに達者♡」

同時におちんぼの方もゆっくりと動き始めた。最初は慣らすように浅い抽挿を繰り返すだけだったが徐々にストロークが長くなる。そして動きが速くなっていくにつれて、肉茎の先端がGスポットを擦り上げていく。

初めはプロデューサーとのサイズ感の違いに驚いたけれど、柔軟な膈洞は段々と義父のおちんぼに慣れ気持ちよくなってきた。次第に喘ぎ声が大きくなっていく。

「んはあああっ♡ はああっ、あ、ああっ♡ あっ、ああんっ♡ お父ちゃんのおちんぼ、旦那さんのより大きい♡♡ あんっ、ああっ！ ああっ、はうううっ、んはああっ♡」

やがて周子は無意識のうちに自分から腰を振ってしまっていた。自ら快楽を求めるその動きはまるで発情期のメス犬。

淫らなダンスを踊る彼女の姿に義父の情欲はますます燃え上がったらしい。ピストン運動のスピードが上がる。パンパンという乾いた音が部屋に響き渡る。それに比例するように快感が増していった。

「はぁあうっ、あぁ……はぁあぁあぁあぁ……いいい……気持ち……いいいいいっ、いいいいっ、いいいっ！　すごい♡　こんなののはじめてやぁ♡　やあんっ♡　ふぁあぁっ♡♡♡」

「そうか、そんなに気持ちいいか」

「うんっ、しゅごいっ……これすごいっ♡♡♡　あううう……っ、イクッ、もうイキそうっ♡♡」

周子は義父の問いかけに素直に答えた。プロデューサーはくれなかったおちんぼ、結婚前より減ったセックス回数、新婚なのにイチャイチャする時間さえない。忘れかけていた男の人と肌を重ねる快感が急速に思い出される。

何より浮気している背徳感が余計に彼女を昂ぶらせた。

(ダメなのに、こんな気持ちいいこと知ったらもう戻れなくなる)

頭では分かっているも身体が言う事を聞かない。おちんぼを迎え入れるたびにキュンキュン疼く子宮が精液を欲していた。射精してもらうためならどんなことでもしてしまいそうだ。

ズチュッ、グチュウ、パンッパンッ、パァン！

義父が激しく腰を打ち付けてくる。亀頭で子宮口をノックされる、カリ首で膈内を擦られる、強烈な快楽に意識を刈り取られる。子宮口が亀頭を啜えこんで離さない。種付けしようとしてくる義父を周子は拒めない。

それどころか受け入れようとしていた。愛する夫ではなく義父のことを、彼女は求めてしまっていた。

「あんっ、あはぁ！　いいっ、きもちいいっ！　奥グリグリっ、すごく感じるっ！　あぁっ、イクうっ！　イクっ、イクっ、イクうっ！　んひいいっ！」

絶頂の瞬間が近いことを告げると義父の動きが激しさを増した。周子の両脚を抱え込んで固定するとラストスパートをかけるべく激しく突き上げた。

結合部からは愛液が飛び散り飛沫となってシーツを濡らしている。汗と体液の混じった淫臭が立ち込めて二人を包み込んだ。互いの体温が伝わり一つに溶け合うような感覚に陥る。

それはまさに愛し合う男女の姿だった。息子の嫁と旦那の父親。お互い

絶対にセックスしたらいけない相手なのに、気持ちよすぎるまぐわいに熱中して頭からスコンと抜け落ちてしまっている。

眼前の相手を別れた妻だと思ってる義父はいざしらず、正しく相手の認識ができていないはずの周子まで、久しぶりに挿れてもらったおちんぼを手放すのが惜しくて流れに身を任せていた。

「そろそろ出すぞ陽子」

「出して♡ あたしのおまんこにおとーちゃんの子種ちょうだい♡」

その瞬間、熱い逆りが胎内へと注ぎ込まれた。火傷しそうなくらいに熱くて濃いザーメンが子宮を満たす。お腹の中に溜まっていく感覚に周子は恍惚とした表情を浮かべた。

(中に出されてる……あたし妊娠しちゃうかも……)

精子も年齢が上がるほど活力は衰える。だが義父ほど遅しくて生殖器も優れてる男の人なら、今からでも二十三歳の孕みごろ卵子に受精させてしまうくらい訳ない気がした。

(あたし……いま本当にこの人の女になってる……)

子宮に収まりきらなかった白濁液が逆流して秘裂から溢れる。それを潤滑油にして義父は再び腰を動かした。抜かずの二回戦。一番ラブラブしてた恋人時代でもプロデューサーにしてもらったことがない。

「あひーっ♡ おとーちゃんっ♡ すごいっ♡ すごいっ♡ もっとして♡ もっとしてっ♡ もっと突いてっ♡ はげしっ♡ ああっ♡ ああっ♡ あっ♡」

今度は最初からトップスピードでピストン運動を始める。そのあまりの激しさに畳の上で周子の身体が滑った。逃げる気はないのに身体が義父の腰に押し出されて彼から離れていってしまう。それを煩わしく感じたか、彼は周子の身体を抱き寄せた。

胡坐をかいた義父の膝に座らされた周子は、対面座位で下から突き上げられた。

「あっひーっ♡ これすごいっ♡ おとーちゃん♡ すごいっ♡ 気持ちいいっ♡ 気持ちいいよおっ♡ シューコちゃん浮気おちんぼで感じちゃってる♡」

周子は両腕を拘束していたトレーナーも脱がされた。自由になった両腕で彼が何かを言う前に抱きついた。背中に手を回して義父の身体にしがみつくと、頑張って腰を振る彼の身体は少し汗ばんでいて、男臭い匂いがした。これがフェロモンというものなのだろうか、鼻腔を通じて脳髄に染み

渡り理性を奪ってゆく。義父の体臭は娼薬のように周子を興奮させた。

「んふう、ちゅ、ちゅぷ、れろお……ん、ちゅ、ちゅぱ、ちゅるる、ちゅ」
義父が唇を合わせてくる。今度は周子も抵抗しなかった。

貪るようなディープキスをしながら互いに舌を絡める。唾液を交換しあいながら口内を蹂躪した。舌と舌が絡み合いお互いの歯茎を舐め回す。息苦しさを覚えながらもそれさえも快感に変換した。

唇が離れる頃には二人とも息が上がっていた。二人の口の間には粘ついた銀糸が引いている。それが切れてしまう前にまた唇を重ね合った。飽きることなく何度も何度も繰り返すうちにどんどん深くなっていく。

互いの身体を弄りながら口づけを交わす姿はまるで恋人同士のように。こんなに上も下も奥深くまで交わる熱烈なセックスなんてプロデューサーとも最後にしたのはいつだったか。(あかんわ、あたし、もうおとーちゃんにメロメロやん)

自分の心の変化に戸惑う暇もなく、周子は義父の手にお尻を抱えられ上下に揺さぶられた。引退してからもプロデューサーに綺麗だと思ってもらうため節制を欠かさず、アイドル時代と変わらない体型を維持してきた周子の身体を義父は軽々と腕の力だけで持ち上げた。

「あああんっ、もっと、もっとキスしてええっ……あたしのおまんこもっ、めちゃくちゃにしてええっ……あっ♡ あっ♡ あっ♡ おとーちゃん、おとーちゃんっ♡ おとーちゃんのおちんぼしゅごいいいっ♡ ああああ♡♡♡」

「陽子の好きだったやつしてやるからな。これをされると何回でもイケたよな。歳をとってもまだまだ衰えてないところ見せてやる」

言うとき義父は対面座位で繋がったままの体勢から周子を抱えて立ち上がった。いくら周子が軽いと言っても人ひとり抱えて立ち上がるのだから大したものだ。

「ああん♡ こんな体位♡ はじめて♡ こんな格好、恥ずかしいのに……はいい♡ これっ♡ すごいっ♡ 男の人の力強いところみせつけられるっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡」

いわゆる駅弁ファックという体位だ。自重によって深々と突き刺さった肉棒が子宮口をこじ開けようとする。そのたびに子宮全体が押し潰されて周子は痺れるような快感に襲われた。

普通の正常位との違いは、挿入したまま歩くことでさらに深いところを刺激できる点にある。義父は周子に肉棒を突き刺したまま部屋の中を歩き

回った。一步ごとに振動がちんぽを伝わってまんこに響いた。

「うあっ♡ ああ♡ おとーちゃん♡ あひ♡ あひ♡ あひい♡ お、おろして♡ いっかいやすませてえ♡ おとーちゃん♡ だめ、だめえ♡ これだめえ♡ 深い♡ 頭ビリビリするう♡」

義父の動きは止まらない。それどころか速度を上げて、とうとう走り出した。部屋中を周子を抱えたまま走り回る。激しい上下運動で膣内を擦られるたびに彼女の口から嬌声が上がった。

「きゃうんっ！ あひっ、あひいっ♡ ふああっ♡ ふああああっ♡ あうう♡ あううっ♡」

周子はもう完全に快楽に溺れていた。自分の身体を支えてくれる義父の腕に浮かび上がった力こぶや血管を見るだけでゾクゾクする。

(あたしって筋肉フェチだったん？ 違うよね。だけどおとーちゃんの腕遅しいわぁ……)

身体が宙に浮いていても男らしい腕に抱かれている安心感からか恐怖はない。彼になら自分の身を全部預けられる。何も心配せず、このまま快楽の底なし沼へ沈んでしまいたい衝動に駆られる。

(ダメや……もう戻れへん)

周子は完全に堕ちていた。たった一回おめこしてもらっただけで？ とは彼女自身も思うのだが、これはどうしようもない。こんなに若くて美人なお嫁さんをもらっただけで夫の務めを果たさない旦那様に問題ある。(プロデューサーが悪いんや。ショーコちゃんのこと放ったらかしにして寂しくさせるから。だから、あたしは悪くない)

責任転嫁も甚だしい言い訳をする周子。その目はとろんと蕩けていた。義父を見つめる視線は恋する乙女のそれ。

「陽子、そろそろ出すぞ」

「出して♡ あたしのおまんこにおとーちゃんの子種ちょうだい♡」

「ちゃんと孕むんだぞ」

「はいっ♡ シューコちゃん孕みます♡ 孕みたいです♡ 産みたいです♡ シューコちゃんの赤ちゃん欲しい♡ シューコちゃんに赤ちゃんください♡」

その場の勢いに流されてとんでもないことを口走ってる自覚はあった。だけど本当にお腹の奥の奥までこの人に征服してもらえるのだと思うと、種付け媚びしながら周子は自分の台詞でより気持ちよくなってしまふ。

子宮口が龟头がめり込む。子宮が精液を求めて下りてきてるのが自分で

も分かった。早く子宮に直接ザーメンを注ぎ込んでほしい。受精させてほしいと子宮が訴えかけてくる。

「ああ♡ もうイキそう♡♡ イクッ、イっちゃう♡♡♡ シューコちゃん、おとーちゃんのおちんぼにイカされちゃうううう♡♡ ああっ、ああああっ♡♡」

周子が全身を痙攣させて仰け反る。イッた反動で全身から力が抜けた。義父の首に回していた手にも力が入らず落ちそうになる。だということにおまんこの方はキツくしまり、義父のちんぼを締めつけていた。

「出すぞ！ 出すぞ陽子！ あの男のことなんか全部忘れるくらい濃いので腹を満たしてやる」

びゅるるっ、どびゅーっ、どくんっ、どぶっ、どろおっ、ぐぶうっ、ごぼっ、ごぼお……。

「ああっ、出てる♡ おとーちゃんの精子いっぱいきてるうう♡」

遺伝情報を携えた大量のおたまじゃくしがピチピチと膣内を泳ぎ回り子宮に飛び込む。熱く煮え滾った粘液が胎内を満たす感覚に周子は歓喜の声を上げた。

義父は一度や二度の射精で満足するフニャチンではなかった。

畳に敷かれた布団の上で周子は四つん這いになり後ろから突かれる。義父の肉棒は目の前の女を快楽漬けにして二度と自分から逃げられないようにするため、ここが勝負どころと張り切って勃起した。

「ん、あっ、ああん♡ ま、まだ硬くなるんだああっ♡ あん♡ んっ、んう♡♡ はああ♡ は、はああ——♡」

バックからの攻めに耐えかねて周子の上半身を支えていた腕が崩れた。布団に顔を突っ伏しながら尻を高く掲げた格好で喘ぐ。その姿は交尾中の雌犬そのもの。そこに元トップアイドルの高貴さなど微塵おんもない。三十も歳が離れた義父におまんこ使ってもらって幸せおんになってる雌おんだけだった。

「はあ、はあ、ふう、ふう、ふう……」

インターバルなしの三連戦でも周子の体力は尽きていない。それは義父も同様だった。精力旺盛な彼はまだまだ余裕がある。

「ほら、もっと腰を振れ。自分からおまんこをちんぼに絡めてくるんだ」

言われるままに周子は尻を振り始める。円を描くようにして膣壁をうねらせる。自分の気持ちいいところに当てるように腰を動かすと自然と声が漏れてしまう。

「ああんっ、気持ちいいっ、きもちいいわあっ♡ ああっ、お、おくに
おちんぼ当たってっ♡ ああっ、んんんっ♡♡」

周子が絶頂を迎えたのはそれから間もなくのことだった。全身を痙攣させて仰け反ると、次の瞬間には力なく布団に倒れた。

全身が痺れて動けないしていると義父が背後から抱きついてきた。そのまましばらくの間、二人は繋がったまま抱き合った。やがて周子の方から背後を振り向き義父にキスをねだった。

「んちゅっ、ちゅぶっ、んはあ……はあはあ……もういっかい」

周子が満足するまでふたりは何度も口づけを交わした。その間ずっと義父の手は彼女の手を握っていた。この女は離さないぞと主張されてるようで周子は背中がこそばゆくなった。

「すまない周子ちゃん！」

一晩じっくりたっぷり義父と義娘という関係を脱ぎ捨て、一組のおちんぼとおまんこになってお互いの身体を貪り合った翌朝、義父は周子が目を覚ますなり土下座した。

結局あの後もふたりの行為は続きセックス疲れで周子がダウンした明け方にやっと終わった。

もしも途中でプロデューサーが帰ってきていたら何の言い訳もできないシチュエーションだったが、酒に溺れていた義父はともかく、周子はプロデューサーから今晚は帰れないと連絡をもらった上で快楽に溺れていた。その辺りは女の方がきっちりしたものである。

同じ布団で折り重なるように寝たふたりは、当然のように同じ布団で目覚める。

義父は目を覚まして凍りついた。自分の横に精液まみれで肌がカピカピの息子嫁が寝ているのだ。ずいぶん昔に出て行った嫁を夢の中で荒々しく抱いたが、まさかあれはと思ひ至る。義父はすぐに現実を受け入れた。そして謝罪した。

「本当に申し訳ないことをしてしまった。謝っても到底許されることではない。煮るなり焼くなり警察に突き出すなり好きにしてくれ」

「いや、別にええよ。あたしも途中から受け入れたんやし」

「だが、それではワシの気が済まない。周子ちゃんは優しいからワシを罰せないんだろう。ならばワシが自分で警察に自首を——」

「いやいやいや。警察沙汰にするつもりはないから。いったん落ち着いて

話し合お。ね？」

義父の自分を罰してくれという申し出は彼の罪悪感から出た言葉だろうが、警察沙汰となれば昨夜なにがあったか一部始終を話さねばならない。そうなるとプロデューサーにも知られてしまう訳で、途中から悦んで義父ちゃんぽに身を委ね騎乗位まで披露してしまった周子としてはうまくない。

結局この場は一夜の過ちで終わらせるのが周子にもメリットある落とし所だ。

「昨日の事は二人だけの秘密にしようか。だからおとーちゃんも気に病まんといて……ねっ？」

それに義父が抱えていた寂しさは周子にとっても他人事ではなかった。人肌恋しいふたりが、お互いの寂しさを紛らわすのに適した相手を見つけ、酒の力やその場の雰囲気ですて身を寄せ合ってしまった。それを周子も誰にも責められたくないし、責めたくなかった。

だが、なかったことにしようと言って簡単に忘れられるような体験ではない。あの夜から義父の周子に対する態度は余所余所しかった。それを彼女は自分への罪悪感ゆえと考えていた。

それが微妙に誤解を含んでいたと分かったのは、激しく交わってから数日たった日のこと。

「買い物に出て財布を忘れるなんてシューコちゃんもウツカリしてたな」

独り言を呟きながら周子はマンションに戻ってきた。

家にいると神妙な面持ちの義父とふたりっきりになってしまう。自分の顔を見るたび申し訳なさそうに大きな身体を小さく折り畳む義父の姿が不憫で見えられず、周子は買い物を口実に出かけたのだが途中で財布がないことに気づいてしまった。

あの夜から周子と義父の間で例の件に関する話は禁句になっている。あたしが気にしないって言ってるんだから、おとーちゃんも気にしないでいいよと声をかけてやりたいが、そうやって思い出させることが彼を追い詰めてしまっはやぶ蛇だ。家を出て別居すると言いかねない。

三人暮らしを前提に借りた無駄に広い部屋。あの部屋に自分ひとりだけ毎晩ぽつんと取り残されるかと思うと周子は寂しさが募る。実家暮らしから上京してきても寮住まい、一度も一人暮らしを経験しないままプロデューサーと結婚し同居した周子は、一人で寝る心細さを大人になるまで知らなかった。

多忙で家を空けがちなプロデューサーから義父との同居を打診されたとき、あっさり頷いたのも家に誰かいて欲しい気持ちがあったからだと今なら分かる。

「たっだいまー」

努めて明るく周子はドアを開いた。直前まで抱えていた寂寥感などおくびにも出さない。元気で明るいシューコちゃんの顔を作る。

(あれ?)

いつもなら「おかえり周子ちゃん」と言ってくれる義父が顔を見せない。靴は玄関にあるから家にはいるはずだが。

おっかしいなあと思いながら周子は廊下を義父の部屋の方に進んだ。

「周子ちゃん……周子……周子おおおおおおおおおおお！」

廊下の奥から名前を呼ばれた周子はビクッと身体を跳ねさせた。義父が自分を呼んでいる。それも切羽詰まった声で。いったい何ごとかと急いで向かう。

「おとーちゃんどっか痛いん？」

ノックもなにもなしでいきなり周子はドアを開けてしまう。目に飛び込んできたのはスマホを前にちんぽを握りしめ、一心不乱に扱っている義父の姿だった。スマホに映っているのは……。

(あたし? あれってあたしのアイドル時代の写真だよな)

義父はアイドル時代に撮影された周子の水着姿でオナニーしていた。当時まだ十代。プールで行われる企画のため水着で参加が必須だった。今よりも少しだけ若い周子の下着同然な姿に義父は劣情を滾らせたようだ。

義父は画面の中の周子に欲望をぶちまけた。白濁液が飛び散り周子の顔を汚す。それでもなお収まらないのか、二度三度と射精を繰り返した。そして最後に大きく息を吐くと呆然と立ち尽くす周子の方を向いた。その顔はまるで憑き物が落ちたかのように穏やかであった。

しかし、次第に状況が飲み込めてくると顔色が青くなる。顔面蒼白とはこのことか。

「す、すまん! 一度ならず二度までも！」

義父はあの夜以来の土下座を見せた。上はちゃんと服を着ているが下半身は丸出しである。その情けない姿を見て逆に周子も落ち着きを取り戻すことができた。

「もうええよ、頭上げて」

「許してくれるのか……?’

恐る恐るといった様子で義父は顔を上げる。酔った勢いで襲いかかった数日後に今度は、自分をおかずにオナニーするところまで見せられたのだ。今度こそ周子に家から出て行けと言われると覚悟していたのだろう。

だが周子は困惑しながらも微笑を浮かべた。

「許すも何も、あたしは怒ってへんよ」

「そんな……」

「ほら！ おとーちゃんも男の人だから、溜まってる？ てことなのかな。そういうこともあるよね。フツーだよフツー」

「……すまない」

「あーもう、また謝るー」

何度も頭を下げる義父に周子は呆れながらも笑ってみせた。本当は少し動揺していたが、ここでそんな素振りを見せたら義父はますます萎縮してしまうだろう。これ以上の罪悪感を背負い込ませたくない。

「それにしても」気まずい雰囲気を払拭しようと周子は明るい声を出した。「おとーちゃんもおとーちゃんだよ。いくら奥さんがいないからってシューコちゃんをおかずにする～？ 世の中にはいい女の人が山ほど溢れてんだから、こんなガサツでグータラな女に目移りしてるようじゃアカンよ～？」

周子にとってはこの場を冗談めかして流すための言葉だったが、己を卑下する台詞に義父は感じるところがあったようだ。土下座からガバッと身を起こすと真っ直ぐに周子を見据えた。

「そんなことはない！ 周子ちゃんは明るくて優しくとても素敵な女性だ。冗談でも自分を貶めるようなことを言うものじゃないよ。そうやって自分で自分を下に置く態度は続けていると習慣になる。習慣は生き方になる。そんな生き方をして欲しいと周子ちゃんのご両親も思っていないはずだ」

最前までの情けない姿から一転、自虐的な物言いで自分を下げる周子に諭して聞かせる姿は、頼りになる父親の顔だった。

ストレートに褒められたことが嬉しくて周子は顔がニヤけてしまう。同時に気恥ずかしさもあってつい茶化してしまった。

「えー、それってつまり、おとーちゃんから見てシューコちゃんは美人さんってことお？ 照れちゃうなあ～」

軽口で返したことを真顔で受け止められると冗談は言ったほうが恥ずかしくなる。今の周子がそうだった。自分を見つめる義父の目が揺らぎもし

ないので、周子はますます照れ臭くなってそっぽを向いた。

「……うん、まあ、ありがとね。嬉しいわ」

恥ずかしくなって周子は俯いた。視線を義父の目から逃がした訳だが、逃げた先で周子を待っていたのは彼の未だ収まらぬ勃起だった。射精したばかりの精液を先端から垂らして屹立は元気に天井を向いていた。

義父の精力絶倫っぷりは周子も嫌というほど分からせられていたが、それは異常な興奮状態にあった夜限定ではなかったらしい。

義理の娘に勃起を見られた義父はバツの悪い顔をして立ち上がった。

「あ、あはは……ごめん、トイレ行ってくる」

そう言ってそそくさと立ち去ろうとするが、周子の一言が彼を引き止めた。

「ねえ、それどうするの？」

「え？」

「あたしで興奮したんでしょ？ なら、シューコちゃんがスッキリさせたげる」

「いや、だが——」

「遠慮しないでいいよ。あたしでそうなったなら、あたしの責任でもあるし。だけど本番はダメね。そんなわり……手でしょっか？」

戸惑いを見せる義父に対して周子は強引に押し切った。真面目で優しい義父がこうなってしまったのは自分のせいでもあるという負い目があった。本来はプロデューサーに向けるべき親密さを彼がいない分、義父に向けてしまった部分が周子にはあった。

三十も年下で元トップアイドルの女にベタベタ纏わりつかれれば、男の人ならエッチな気分になっても仕方ない。もっとあたしも考えておけばよかった、だけど寂しさと人肌恋しさでその気はなくとも義父を誘惑するようなこととしてしまった。

自分が発端で起きたことなのだし、彼の性処理を手伝おうと思った。

立ち上がった義父の近くのにじり寄ると周子の顔はちょうど彼の股間の高さに来る。

射精したばかりのおちんぼは雄臭い臭いを放っていた。嗅いでるだけで周子の雌があの日を思い出す。明け方まで啼かされ義父の雌に屈服した記憶が鮮明に思い出された。

(ああ……あかん……やっぱり好きや)

義父は自分ばかりが周子を女として意識するようになってしまったと思ってい

る。だが実際は違う。あの晩以来、周子も義父のことを異性として意識するようになった。だがプロデューサーの妻である自分が彼の父親と過ちを繰り返すなどあってはならない、それは人道にもとるというやつではないかとブレーキを掛けていた。

それなのに……。

(こんな大きいおちんぼ見せられて我慢できるわけないやん。てか本当にデッカ！　こんなに大きかったっけ？　あのときはいきなり押し倒されてなし崩しにエッチしたし、一度始めたらお互い夢中でほとんどおちんぼはあたしの膣内に入りっぱなしだったし、見る暇なかったんだよねー。まじまじ見ると本当にこんなのがシューコちゃんの膣内に入っちゃうわけ？)

自分の理性を剥ぎ取り、快楽だけを求めるケダモノの本性を剥き出しにさせた巨根と素面でご対面すると、周子は子宮が疼いて即座に濡らしてしまった。

目の前にあるおちんぼがどれだけ気持ちいいか周子は知ってしまった。

(これ、啜えたい……)

生唾を飲み込んでしまうほどに、目の前にあるおちんぼは魅力的に見えた。フェラチオしたい衝動に駆られた。手でしてあげると言ったが、手だけで済ませるとは言ってない。

口でも味わってみたい。舐めてしゃぶってしゃぶり倒したい。

そんな期待を込めて見上げると、義父は申し訳なさそうに口を開いた。「気持ちは嬉しいんだが、そこまで甘える訳にはいかないよ。周子ちゃんも無理しなくていいから」

「なに言ってんの？　無理なんかしてないし。おちんぼ大きいからって大きい顔せんといってくれる～？」

できるし、これくらい余裕だから、プロデューサーのは啜えられたからと周子は自分で自分を勇気づけた。

義父の股間に顔を寄せ、そっと舌を伸ばした。舌先が亀頭に触れた瞬間、ピクッと反応したのは驚いたのか、それとも感じたのか。どちらにせよ義父のリアクションに気をよくした周子は、そのままペロッと舐め上げた。味は苦いようなしょっぱいような不思議な感じだったが嫌なものではなかった。むしろ美味しいと感じたほどだ。

それから舌を伸ばして竿を舐め回す。裏筋に沿って下から上へ、上から

下へ。未だ竿に付着したままの射精残滓を綺麗に舐め取る。カリ首の段差部分は特に念入りに舐める。そうしているうちに義父のおちんぼは、また元気を取り戻していった。

精液まみれになったおちんぼを見て周子はゴクリと喉を鳴らした。いよいよ口に含むときが来た。口の中に唾が溢れてくる。心臓が早鐘を打つように高鳴る。意を決して口を大きく開けた。

歯を立てないように慎重に頭を前後に動かす。唇で竿を挟んで上下に擦る。唾液が潤滑油となって動きやすい。じゅっぽじゅっぽと音を立てて顔を前後させる。口の中で大きくなっていく肉棒を感じるたびに嬉しくなった。このおちんぼが自分の膣に入って気持ちよくしてくれたのだと思うと愛おしさすら覚える。

(おとーちゃんの味だぁ……)

うっとりとしながら舌を絡める。先っちょから根元にかけて丁寧な舌を這わせる。陰囊も忘れずに手で刺激する。袋の中に詰まった睾丸を指で転がしたり掌で転がすように揉んであげる。

「くっ……ふう……」

頭上から聞こえてくる義父の声には悦びの色が混じっていた。

(感じてくれてるんだ……)

それが嬉しくて周子はますます熱心にフェラチオする。頬の内側の粘膜を使って優しく擦り上げる。

「んちゅ……れろお……くぶうう……ぬぼおぼおぼお……」

次第に口の中に広がる苦みが強くなってきた。新たな先走り汁が出てきたのだ。それも美味だと感じてしまう自分は、もうすっかりおとーちゃんのおちんぼの虜になってしまったのかもしれない。

「ああ……」

義父の口から漏れる声の色っぽいものに変っていく。彼も感じているのだと分かるとさらに気分が高揚してきた。このまま口内発射して欲しい。

「あれあれ～？ おとーちゃんどしたん。おちんぼビクビク震わせて。そんなにシューコちゃんのお口気持ちいいでちゅか～？ シューコちゃんのテクで骨抜きにならんように精々気張ってや～、お・と・う・さ・ま♡」

調子に乗った周子はわざと煽るような言葉を口にした。

挑発的な態度に義父は苦笑したがそれだけだった。泥酔していなければ心根は優しい義父が、親子ほど年齢が離れた小娘に挑発されて激昂するこ

とはない。そういうところも素敵だな～と感じながら周子はフェラを続けた。

今度は頭だけでなく身体ごと動かしてピストン運動を加える。ディープスロートだ。喉奥まで飲み込んで吸い付くように吸引する。喉を締めて先っぽを刺激した。

「ぐうっ！」

これにはさすがの義父も呻き声を上げた。どうやら上手くいったようだ。その証拠に射精間近なの分かるくらい、おちんぼの震えが激しくなっていた。

（そろそろ出そうかな？）

周子は射精を促すために動きを激しくした。バキュームを強めにしてストロークを長く、そして小刻みに速くする。同時に玉袋を揉む手にも力が入る。精子をより多く射精させるためのマッサージ。たまたまさん気張りーやー、写真より実物のほうがびゅっぴゅ量少ないなんて許さないからねの気合を込めた玉揉み。

「ぐぁ……出る……！」

義父が呻くように言った直後、口腔内でおちんぼが弾けた。二度目の射精とは思えないほどの大量の精液が迸った。

「んんっ！ ぶふっ！ ふぐっ！ んんん～～～っっ！」

吐き出された白濁液を周子は懸命に受け止めた。一滴たりとも零してしまるかという気迫で精液を飲み下していく。鼻で呼吸をしながら口で息をすることでなんとか窒息を免れた。

しかし義父の射精量は凄まじく、飲み干せなかった分が口の端から垂れていく。もったいないので手で受け止めようと試みるが間に合わなかった分はそのまま床に滴り落ちた。

やがて長い射精が終わると、ようやく口からおちんぼを抜いた。

「……っぶはぁ……げほっ、ごほごほっ」

思わず咳き込む周子に対して義父は涼しい顔をしていた。それどころか満足そうな笑みを浮かべているではないか。あれだけ出したにも関わらず、萎えることなく勃起を維持したままの逸物を見ていると憎らしくなってくる。

（まったくもう。こんなおちんぼと同居してるって分かったから、シューコちゃんじゃなくても誘惑されちゃうよー）

義父の精液は粘性が高い半固形状のヨーグルトを思わせる濃さだった。

親子でもプロデューのサシャバシヤバ精液とは大違いだ。

「ありがとう周子ちゃん」

息苦しさに放心していると義父の手が周子の頭を撫でた。

「すごく気持ちよかったよ」

大人の男の人の少しガサついた手。それに頭を撫でられながら周子は幼い頃、父親に褒められたときを思い出した。

あのときもこんな風に撫でられて嬉しかったっけ。褒められて誇らしい気持ちになったっけ。

(あ……ダメ……これは……まずいかも……)

周子は身体が熱くなってくるのを感じた。顔が火照った。胸がドキドキしてくる。子宮がキュンとする感覚を覚えた。肉欲だけの熱狂ではない。心の底から包容力のある大人の男の人にトキメいてしまった。

「そ、そう……それはよかったわ～」

動揺を悟られないように努めて冷静に答えたつもりだったが、上ずってしまった声を誤魔化すことはできなかった。

「あ～もうこんな時間やん？ 買いたいものがいっぱいあんのに～！」

精液の飛び散った服や畳を片付けていると時間はあっという間に過ぎてしまう。窓を見れば外では日が暮れ始めていた。

「ごめんよ周子ちゃん。ワシのせいで遅くなってしまって」

着替えを済ませた義父が申し訳なさそうに言った。

「気にせんといていいよ。あたしがやりたくてやったことなんやから」

それより～と周子は義父の手を引いて玄関に向かった。

「おとーちゃん元気になったなら買い物に付き合ってよ。重たい物やらかさばる物、いっぱい抱えてくれる男手が欲しいって思ってたんだよね～」

靴を履くと周子は義父の腕に自分の腕を絡ませ外に出る。その姿は義理の親子というより、さながら歳の離れた恋人といったところ。

「ちょ、ちょちょ、周子ちゃん、みんなに見られるよ」

周りの目を気にして離れるよう言う義父。しかし周子は構わない。それどころか義父の太い腕を両腕で抱きしめ、結婚以来ちょっとだけ大きくなったおっぱいを彼の肘に押し当てた。

「そんなんいーやん。周りの目が気になるならシューコちゃんだけ見てよね。こーんなに可愛い女の子と腕を組んで歩けるなら周りのことなんて気にならないでしょ」

まいったなーと義父は照れくさそうに空いた手で頬を搔くが、周子を引き離そうとはしない。周子が言うとおりに彼だって美人で若い女の子に腕を組まれて本当は嬉しい。

そんな義父の耳元で周子は囁いた。

「これからも末永くよろしくね♡ おとーちゃん♡」

後編

こんなはずじゃなかったのにと結婚してから何度こぼしたか分からない。数えるのも馬鹿らしい。大好きな人といつでも一緒にいるためふたりの関係を世間に公表して結婚したはずなのに、アイドルでなくなった周子はプロデューサーとの接点が大幅に減ってしまった。

アイドルとプロデューサーとして付き合ってるときの方が、夫婦になった後より顔を合わせる時間が多かった。

——こんなはずじゃなかったのに。

分かっている。彼が仕事で大成功を取め辣腕プロデューサーと評価されているからこそ、なかなか家にも帰れないほど多忙を極めていることは。人気の絶頂期にあるアイドルとそれを管理するプロデューサーの忙しさは周子だって骨身に染みていた。

だからって寂しさを感じないはずはない。

愛する人と共に過ごす時間が減ったら誰だって心に穴が空くはずだ。新婚ホヤホヤの時期で一番ラブラブしたい時期に相手が仕事に忙殺されていたら、もっと自分の方を向いて欲しいな程度の不満は持つはずだ。

周子だって本気で文句を言っているわけではない。彼女は自由奔放でマイペースな現代っ子に見えても情に篤い京女。夫の仕事を陰ながら支えたいと思っていた。だから寂しいと思うことはあってもそれを表に出すことはなかったのだが……。

「おとーちゃん、おとーちゃん」

ある日のこと周子は、夕食を終え一緒にテレビを見ていた義父に話しかけた。

「ん？ なんだい？」

義父はソファに並んで座る周子に問い返した。自分の身体に頭をこてんと寄りかからせてくる彼女の肩を抱きながら。その姿は知らない人間が見れば義理の親子というより同棲中のカップル。

元トップアイドル塩見周子、義理の父と疑似近親姦姦関係なんて笑えない見出しが下世話な週刊誌に踊るところを想像させてしまう。

そんなことを気にした素振りもなく義父に甘える周子は、上目遣いに彼の顔を見上げながら言った。

「おとーちゃんは好きな女の子の髪型とか色とかあるん？」

ふたりが見ているテレビでは、男性芸能人たちが好きな異性の髪型について熱く語り合っていた。

「そうだなあ……」

義父は顎に手を当てて考える仕草をした。それからしばらくして口を開いた。

「やっぱりワシは黒髪が好きかな。ワシのような年寄は何のかんの言っても日本人らしい艶のある黒髪が落ち着く」

「へーそうなんだー」

期待していた答えと違って周子は露骨にガッカリした声を出す。だが義父は周子の不機嫌に気づかず続けた。

「ああ、清楚な感じの子には黒髪が一番似合うと思うよ。あと髪の高さはやっぱりロングヘアがいいね。ロング。黒髪の女の子が何気ない仕草でこう……髪をファサってやった時のサラサラ感と色気がたまんな……い……よね……」

熱弁を振っていた義父の勢いが見る見る萎んでいく。彼に抱かれている肩が強張り、目には静かな怒りを溜めている周子の様子にやっと気がついたのだ。

塩見周子と言えば銀髪のショートヘアーでキツネ顔。義父の好みを聞いていると自分とは真逆のTHE京美人を体現した女の子がタイプのように。羽衣小町でユニットを組んでいた小早川紗枝がドンピシャじゃないか。

「うんうん、いいよね～サラサラロングヘアーで黒髪の女の子。奥ゆかしい大和撫子って感じで憧れちゃうよね～。……あれ？ どーしたん？ 元気なくなっちゃったね？ シューコちゃん、おとーちゃんの好みもっと聞きたいんだけどな～」

意地悪く脇腹を突きながら言うとき義父は失言を取り返そうと周子を褒めてくる。

「ワシが言ったのはあくまでも一般論というか、もちろん周子ちゃんには周子ちゃんに似合う髪型があるわけだから、他の人と比べるまでもなくそれが一番だよ」

だけど怒っているときそんな褒められ方をしても、如何にも取って付けた感がある。周子はお仕置きとばかり義父に抱きつくと彼の脇腹や脇の下をくすぐった。

「あははっ、ちょっ、やめっ、周子ちゃんっ！ あひゃひゃっ！」

義父は身体を振って逃れようとするが周子は逃さない。しばらくのあいだソファの上でふたりはじゃれ合った。まるで猫が飼い主にじゃれるみた

いに。

「はあ……はあ……はあ……」

やがて疲れて動きが止まったところでようやくくすぐり攻撃が終わった。乱れた呼吸を整える間、ふたりとも無言だった。しかしそれも束の間のことですぐに笑いが込み上げてきた。

「あっはっはっはっは！」

「うふふふ」

ふたりで顔を見合わせると我慢しきれず大声で笑った。まるで新婚カップルがするようなじゃれつきを義父と演じてしまった。目尻に浮かんだ涙を拭いながら周子は思った。

(まったくもう、あたしってば何やってんの。おとーちゃんがいてくれてよかった)

プロデューサーが帰らない家でひとり寂しく彼を待っていた日々は遠い昔のよう。今はこうして義父と一緒に笑っている自分がある。

思わぬ展開から身体を重ねたことで心の距離もグッと縮まった気がする。以前は単なる同居人だったものが、それこそお互いの欠かせないパートナーになった。

そこまで仲の深まった男女が同じ家で暮らしていて何も起きないはずはなく。今も周子は自分に抱きつかれながら義父の暴れん棒さんが硬くなっているのを感じた。

(おとーちゃんったら可愛いんだから)

周子はズボン越しに勃起を撫でさすりながら思った。若いうちに妻が他の男を作って蒸発し、男手ひとつでプロデューサーを育てた義父は女遊びなどする暇もなかった。人一倍強い性欲を持って余していた義父には、周子の肉体は刺激が強すぎるだろう。

(ま、シューコちゃんもなんだけどねー)

周子も彼に抱きつき、加齢臭混じりの臭いを嗅いでいるだけで、どんどんお腹の奥が熱くなっていくのを感じた。ドロっとした蜜が垂れてくるし、乳首もピンピンに勃起してしまう。

「……する？」

先程までの楽しげな雰囲気から一転。周子が夜のお誘いをするすると義父の顔に一瞬だけ何かを我慢する表情が浮かんだものの、すぐに荒い鼻息とともに吐き出される。

「お願いしようかな」

義父の言葉を聞いて周子は彼のズボンに手をかけた。

あの夜から周子はたびたび義父のオナサボをしている。はじめは週に何度か手でするだけだった。彼の中では、完全に一線を越えてしまったのは酒の弾みによるもので、やはり息子の嫁を素面で抱く気にはなれないらしい。さりとて溜まるものは溜まる。まだまだ男として枯れてない義父が三十も年下の元アイドルと同居して、エッチなこともオーケーと言われ全部拒否する意思は持てなかった。

周子が「セックスはダメでも手だけなら介護みたいなものでしょ。男の人は溜めすぎても身体に良くないって言うしー」と妥協案を示すと、義父は垂らされた釣り糸に食いついてしまった。

かつてファンの前でマイクを握り、綺羅びやかなステージから歌を届けていたその手が、自分のちんぼを握って扱ってくれる。そんな誘惑に勝てる男の方が稀有だろう。

一度その味を知ってしまうと男は弱い。まして相手は息子より年下の極上美少女なのだ。その容姿だけで金が取れるレベルの美人が、自分のような冴えない中年男の前に跪き、ちんぼ越し上目遣いでこちらの顔を見ながらシコシコしてくれる。

はじめは週に何度かだった行為が毎日の日課となり、手だけという話だったプレイ内容にお口も加わった。オナバレからフェラしてもらった日に感じた快感を忘れられないでいた義父が、手コキしてもらいながらつつい周子の唇に熱い視線を送ってしまい、悪戯好きの義娘に気づかれてしまった。

最初は「ダメだよ、そこまでしてもらわねえにいかないって」と言っていた義父も、ぱっくんちょされると気持ちいいことがしたい本能には逆らえなかった。

以来、夜になるとふたりの行為は続いている。最初はリビングで、次は寝室で、そして最近ではお風呂場でまで及ぶようになった。

「おとーちゃんもすっかりシューコちゃんの虜だね～」

「周子ちゃんみたいな綺麗な女の子に誘われて落ちない男がいたら見てみたいよ」

「えへへ～おだてたって何にも出ないよ～♡」

周子は上機嫌に鼻歌を歌いながら義父のズボンをパンツごと下ろした。

窮屈な下着から解放された雄莖は、むわっと雄の臭いを漂わせる。まだ半勃ち状態なのに太さも長さもプロデューサーの全開時ほどある立派な

肉竿だ。血管が浮き出てグロテスクな見た目をしたソレがピクンと跳ねるように動いたのを見て、周子の子宮がキュンと疼いた。

(こんな凶悪なもの見せられたら身体が疼いちゃっても仕方ないよねー)

だからといってふたりはセックスしない。義父はオナサボまでの建前を頑なに守る。周子も周子でプロデューサーを完全に捨て去り、義父と懇ろになるまでの覚悟は持てなかった。まだどこかでプロデューサーさんと人並みに愛し合いたい希望は消えてない。

おかげで周子は義父のバキバキちんぽを相手した後、悶々と火照る身体を自分で鎮めることになるのだが。

周子はまだ芯の通ってない肉棒の先端にチュッとキスをした。それだけで敏感になっている亀頭がピクピク震えるのが分かる。

「うふ♡ 可愛い反応でちゅねー」

そのまま舌を出してペロッと舐めると、塩辛い味が口の中に広がった。鈴口に滲む先走りを舐め取り、カリ首に舌を這わせた。裏筋に沿って舌を動かすとムクムクッと膨らんでいくのがわかる。それが面白くて周子は何度も舐めたり吸ったりした。

唾液まみれにした肉棒をしごきながら先端を口に含む。唇で食むようにしながら舌で尿道を刺激するとしょっぱいカウパー液が溢れてきた。それをジュルルと音を立てて吸い込む。喉奥に粘っこい液体が流れ込んでくる。苦くて塩辛くて美味しいとはお世辞にも言えないはずなのに、これがおとーちゃんの味だと思うと興奮する。

「おとーちゃん……ひもちいい？」

啜えたまま喋ると義父は気持ちよさそうに顔を歪めてくれた。嬉しくなった周子は更に激しく責め立てる。口をすぼめて前後に動かしながら、同時に右手で玉袋を揉みほぐした。

じゅぼじゅぼ音を立てながら顔を動かすたびに、口の中のモノが大きくなっていく。顎が疲れてきたけどもっと続けたい。ただどそろそろ限界みたい。

口の中で膨らんだ義父の剛直がドクンドクン脈打ち始めたのだ。射精の前兆を感じとった周子は顔を前後させる速度を上げた。それを合図に義父の腰がカクカク震え出す。

「しゅこ……ちゃ……ん……もう……っ……」

射精が近いのだろう。義父が追い詰められた声を出す。

その声に気を良くした周子はトドメとばかりに思いっきり吸い上げた。

次の瞬間、爆発するように精液が迸った。

ドピュッ！ ピュクッ！ ピュクン！

大量の白濁汁が口内にぶちまけられる。勢いよく飛び出した精液が喉の奥に当たる。苦いのになぜか美味しく感じるそれはあつという間に口内を満たしていった。

「んんっ！」

勢いが強すぎて口から溢れてしまいそうになるくらい大量だった。あまりの量の多さに思わず噎せそうになるが何とか堪えた。それでも口の端から白い粘液がいくらか漏れてしまう。

(あーあ、もったいないなー)

そう思いながら周子は自分の顎から床に伝い落ちる精液や、口の周りについた白濁液を指で掬って舐め取った。

(んっ、濃い……♡)

鼻に抜ける青臭さに頭がクラクラする。何度味わっても飽きない男の味だ。

周子の奉仕を受けた義父は、気持ちよさそうな呻き声を上げている。その目は快楽で潤んでおり、普段の彼と違ってどこか野性的で男っぽい。

(ふふ、おとーちゃんったらまるでケダモノみたいだよー)

周子は彼の目を見ながら心の中でほくそ笑んだ。普段は紳士的で優しいおとーちゃんだが、今は獣のように盛っている。そのギャップに興奮を覚えずにはいられない。

一滴残らず口の中の精液を胃に収めた周子は、んべ〜と義父の前で口を開いた。精液臭い息を吐き出しながら、ごっくんできたよの報告だ。

「全部飲んでくれたんだね……嬉しいよ周子ちゃん」

そう言って義父は幼い娘にするように周子の頭を撫でてくれる。それがこそばゆくて周子は身を振るが、嫌ではないので撫でられるままにした。

こうやって褒めてもらえる時間が周子にとっても堪らなく嬉しい。

別な日にはふたりで一緒にお風呂にも入った。

周子は義父がズリネタにしていた彼女の写真と似た水着を着ている。

「ほらほら、おとーちゃんどう？ シューコちゃんも案外あるでしょ」

ビキニ姿の周子が腕で胸を左右から寄せてくると、意外に深い谷間から義父は目を離せなくなった。同じグループに速水奏おじさん殺しおっぼいや城ヶ崎美嘉おサバおっぼいがいたせいで目立たないが、スレンダー担当と思われた周子も男のちんぽを元

気にするだけのボリュームがある。

その胸で周子は義父のおちんぼを洗ってあげた。ボディソープまみれの谷間に挟まれ、ぐにゅぐにゅ左右から柔らかい脂肪の塊を押しつけられた義父の陰茎は0すぐに硬くなる。乳白色の粘液の中で勃起していく自分のちんぼを見て、義父は羞恥に顔を赤らめていた。

しかしそれも一瞬のことですぐに気持ちよさそうな顔になる。聞けば奥さんがいたときもパイズリなどしてもらったことないらしい。初めての経験に夢中になっているようだ。

義父の反応に気をよくした周子はさらにサービスしてあげたくなった。「シューコちゃんのおっぱいもなかなかのもんでしょ〜？」

情けない顔で自分の谷間まんこを味わう義父に周子は得意げに言った。左右から寄せた胸を前後に捻り、コークスクリューパイズリで大きなちんぼの根本から先端へ押し出すように乳肉を絡めた。

ぬりゅん♡ ずちゅ♡ ずちゅ♡

ローション代わりに塗布されたボディソープと我慢汁とが混ざり合っ
て卑猥な音を立てる。滑りがよくなったおかげで乳房を上下運動させる速度が上がり、よりスムーズに抜くことができるようになった。時折、亀頭の先っぽを指先でグリグリしたり、胸の谷間から出たり入ったりするおちんぼの裏筋を撫でたりすると面白いように反応するので楽しくなってしまう。

(えへへ、おとーちゃん可愛いなあ)

義父は真っ赤な顔を天井に向けている。足の間に跪いた体勢では表情が見えない。必死に歯を食いしばって耐えてる姿を想像すると周子は胸がキュンとした。

「ほ〜ら♡ 晩御飯作んなきゃなんだから♡ さっさとビュッビュッしてや〜♡ うりうり〜♡」

調子に乗った周子は両手を使い、ふたつの肉塊を同時に上下に動かす。その動きは徐々に激しさを増し、ラストスパートをかけた。義父の腰がガクガク震えてるのが分かる。もうすぐイキそう。

トドメとばかりに周子は左右の乳首をカリ首に引っ掛けるようにして擦り合わせた。それが呼び水となって、熱い飛沫が弾ける。

どびゅるるるる！ びゅるる！ ぶゅるる！ びるる！ ぶびるる！
ぶっびるるううう！

噴水のような勢いで吐き出されるザーメンシャワー。谷間のブロックを

掻い潜って周子の顔にまで達する。生臭い臭いが鼻をつくも不快感はない。むしろ余計に興奮してくるくらいだ。顔にかかった白濁液を指ですくい取って口に運ぶ。舌の上で転がすと独特な苦みが広がった。

(こんな美味しいと感じるなんて、あたしもすっかり変わっちゃったな)

そんなことを考えているうちにようやく射精が終わったようだ。肩で息をしている義父の顔を見上げると、満足げな笑みを浮かべていた。

ズリネタにしていた美女にズリネタとほぼ同じ格好でパイズリ搾精してもらう。夢のようなシチュエーションがもたらした強烈過ぎる射精に義父は息も絶え絶え。風呂場の壁に手をつけて倒れないよう身体を支えていた。

「お疲れさん。頑張ったおとーちゃんには、ご褒美やらんとな」

イッたばかりで敏感になってるペニスを頬張ると、義父は悲鳴にも似た歓喜の声を上げた。

「あっ、ちょっ……シューコちゃん、今はおちんちん気持ちよすぎて……あああああ」

「ええやん別に。お風呂に入っておちんぼ汚したままのほうが不潔だよ」

「そんな……ダメだってばあ……ああっ！」

周子にしゃぶられ硬度を取り戻していく義父の分身。ニヤリと笑った周子は一気に喉奥まで咥えこんだ。義父のものを咥えて鍛えられたディープスロート。喉奥にゴンゴン当たる異物感すら心地良い刺激となる。

口を窄めて頭を前後に動かした。じゅぼじゅぼという水音に合わせて唾液にまみれた肉棒が口腔内で暴れ回る。

「うう……すごい……気持ちいい……」

お掃除フェラされて前屈みの義父を上目遣いに見ながら、周子は心の中で一擦りごと目の前のおちんぼさんを褒めてあげる。

(いっぱい射精できて偉いやん。本当に嬉しいおちんぼさんだね。よく頑張ったね♡ 偉い♡ 偉い♡)

愛情たっぷり献身的な口奉仕に義父も頭を撫でて応えてくれる。お互いを無言で褒め合った。

そうやって日々の孤独感をやり過ごしていても、嫌でも現実を思い出させられる瞬間がくる。

その日は周子とプロデューサーの結婚記念日だった。結婚三周年。ふたりにとって特別な日であるはずなのに、彼は仕事で帰宅できないと連絡があった。

今日こそは早く帰ってきてくれるはずと期待し、朝から部屋の片付けに手の込んだ料理の支度にと忙しく動き回っていた周子は、スマホを握りしめながら絶句してしまう。

毎年この日ばかりは仕事を早めに切り上げて帰ってきてくれたのに。一緒に祝う習わしだったのに、とうとう今年はそれさえもなくなってしまうのか。

目の前で冷めていく料理を前に周子は、スマホから聞こえてくるプロデューサーの声に耳を傾けた。

「悪い！ 大雨で電車が動かなくなっちゃってさ。ロケ現場から今日中に戻れそうにないんだ」

電話越しに彼は申し訳なさそうに謝り倒した。その声を聴いてると怒る気にもなれない。だって彼のせいではないのだから。

窓外に目をやると暗闇に無数の線が走っている。地上の穢も悪徳も洗い流すように降り注ぐ雨。これだけ降ってれば交通機関が停まっても不思議ではない。

「……いいよ、お仕事だもん。仕方ないよね」

努めて明るい声で返す。本当は寂しいくせに。本当は悲しいくせに。本音とは裏腹の自分を取り繕ってしまう。もっと早く連絡してくれたら無駄に期待しなくて済んだのに。こんなに作っちゃった料理どうするのさ。上げて落とすのが一番残酷だよ。

だけど言わない。言えない。プロデューサーさんの前では明るくて飄々として動じないシューコちゃん。それが彼の好きになってくれた塩見周子だから。

「埋め合わせは必ずするからさ」

「ほんとに～？ 期待しないで待っておこうかな。シューコちゃんも大人だしねー」

そう言って周子は電話を切ろうとした。これ以上は無理だ。思いのほか自分は凹んでるみたい。

「プロデューサーさんお風呂空いたよ～」

通話を切る直前でスピーカーから女の声が聞こえてくる。咄嗟に問い詰めたかったのは、予想外のことに喉が張り付いて声も出なかつただけだっ

た。

「え？ あ？ 奥さんと電話中？ ごめんなさ〜い」

わざとらしい女の台詞に周子は胃が氷漬けになったように腹の奥が冷えた。すべての体温がそこに奪われてしまう。動揺しすぎて周囲からは冷静に見えてしまう状態だ。

「違うんだ周子。言い訳させてくれ」

自分で言い訳と前もって言っちゃうプロデューサー。彼の慌てた様子を鼻で笑い「ほな聞きましょか〜」と周子は発言を許可する。

「ロケ終わりで帰ろうと駅まで行ったが電車は停まって動かない。それじゃあ元のホテルに戻って部屋を取り直そうと思ったら、既に次の予約客のために稼働してるから無理だと言われた」

「ほほう」

「そこで仕方なく近くのホテルを虱潰しに探したんだが、人気の観光地だけに急な飛び込みでは難しい。やっと一部屋だけ空いているホテルを見つけたんだ。もちろん俺と一緒に泊まるなんてまずい、ネカフェかカラオケでも探すよと言ったんだが生憎こいらにそういったものはないらしくてな」

「へー、そうなんや。ふーん、そっかー」

心ここにあらずといった様子の周子は棒読み口調で相槌を打つ。それに不穏な夫婦の危機を感じてかプロデューサーは謝罪しっぱなしだった。

(ん〜……まあ、こんだけ長い間会わないとそーもなるよねー。嫌いになったわけじゃないけど結婚した当初の熱は維持できないっていうかあ？

周りには若くて綺麗な女の子ばかりいるわけだし)

三年前まで自分も彼を囲む若くて綺麗な女の子のひとりだった周子は、当時から彼がモテていたことを思い出す。

角ばってて男っぽい義父と血の繋がりがあるとは思えない繊細でスラッとした見た目。面影や身のこなしは洗練されていて、こちらの気持ちを讀んだように先回りして何くれとなくケアしてくれる。

社会経験の少ない十代や二十歳そこそこの女の子がくらくきてのぼせてしまいそうな、大人の男の人だった。実際、何人もの女が彼に夢中になっていたことを周子は知っている。あの手この手で彼を落とそうと躍起になっていた。

付き合ってみると実は子供っぽくて優柔不断なところもあるのだが、その頃には好きになってしまってるので惚れた相手の欠点も美点に見えて

しまう。

この三年間で彼はプロデューサーとしての名声を高め、出世して社会的ステータスも上昇した。より魅力的な優良物件になった。薬指に指輪があるかどうかなど気にしない女も多いだろう。

「もしもし？ 周子聞ってる」

「うん、聞いてますよー」

「……怒ってる？」

「怒ってへんよー」

「そうか良かった……いや良くないんだけど」

触れられない塩見周子より触れる若手アイドルですか、そうですか。皮肉っぽく心の内で唱えながらも周子を取り乱したり、喚き出したりしないのは、自分もまた心細さを義父とのいかがわしい行為で埋め合わせしていたからだ。

（あたしだって、おとーちゃんとエッチいことしてたわけだし、彼のことばかり一方的に責めるのは嘘やん）

だから彼が他の女と寝てようがそのこと自体に腹を立てるつもりはなかった。ただ、よりもよって今日というタイミングで、他の女の存在を匂わせてくることはないじゃないか、一年は三百六十五日あるんだから他の日でもよかったろとは思ってしまう。

浮かれていた分だけ周子は己が惨めで滑稽に感じた。

そのときだ。そっと背後から誰かの腕が周子の身体に回された。振り返ると義父の顔が肩越しに見えた。そのまま周子は唇を奪われる。義父の舌がぬるりと口腔内に入ってくるなり、貪るように舌を絡めてきた。歯茎の裏を舐められると背筋がゾクゾクした。舌の裏側をくすぐられて力が抜けていく。口腔内全体が性感帯になってしまったように敏感だ。唾液を飲まされると身体が火照ってくるのが分かった。キスだけでイッってしまう。それくらい気持ちがいい。

唇を離す。周子と義父は無言で見つめ合った。

周子の異変を察して慰めようとしてくれる義父の包容と口づけが、彼女の凍りついた身体を溶かしてくれる。直前まで感じていた寂しさも落ち込んだ気持ちもスッと消えて楽になる。

（ああ……あたし……もう、おとーちゃんのことのほうが……男の人としても好きになってしまってるんやな）

あたしは大丈夫だから、と周子は彼の手を握り返し無言で伝えた。

「そういうことなら仕方ないよ。事情は分かったから。うん、あたしは大丈夫。おとーちゃんが傍にいてくれるから寂しくないよ。お仕事頑張ってるね」

それだけ言うと周子は彼の返事も聞かずに通話を切った。テーブルの上にはスマホを投げ出すと、彼女の方からも義父に抱きつきふたりは一層激しいキスをした。

「あっあっあっ」

寝室には淫らな喘ぎ声が響いている。ベッドは軋み、シーツには汗やら愛液やら体液が飛び散っていた。それでもふたりの行為は止まらない。むしろ激しさを増す一方だった。

ベッドの上で四つん這いになって尻を高く上げた体勢で周子は喘いでいた。バックからの挿入に快楽の音が止まらない。逞しすぎる剛直を振じ込まれ、背後からパンパンパンッと突かれる愉悦に何度も頭を振り、感極まる声で身悶えた。

「あっ♡ んっ♡ あっ♡♡」

子宮口を扱られるたびに甲高い声上がる。突かれると身体の芯が熱くなって脳天にまで快感が突き抜けた。

全裸に剥かれた肌はシミひとつない。体型は今すぐでもアイドルに復帰できそうなスタイルを維持している。むしろ年齢なりに成熟したことで胸やお尻は程よく肉がつき、アイドル時代よりも性的な意味で男ウケする肉体になっていた。

「あぁ♡ おちんぼお♡ おちんぼすごい♡ おちんぼしゅごいのおおっ♡♡♡」

現役のトップアイドルと比較しても遜色ない美女が、五十を過ぎたおじさんちんぽで激しく乱れ、おちんぼおちんぽと連呼する。しかも場所は義父の寝室ではなく、周子と息子が愛を交わすはずだった夫婦の寝室。ここでするセックスは、まさに彼が周子と息子の夫婦関係に乗っ取ったことの証であった。

そのことを申し訳ないと考えているのか最初は躊躇いがちだった義父も、いざお互いの身体を弄る前戯から始まり徐々にセックスが熱を帯びてくるともはや後戻りは不可能。あの夜以来、頑なに越えないようにしてきた一線をあっさりとして越え、今では周子の膣内を息子に遺伝しなかったカリ高デカチンで蹂躪している。

ぐちゅりと音を立てて膣壁を擦り上げる肉棒の逞しさに周子は酔い痴れる。硬く反り返った逞しい逸物は、彼女の蜜壺の中で暴れまわる。そのたびに甘い声を上げながら淫らに乱れた。

「あはぁ♡ これしゅきいい♡♡ んおっ♡♡♡ おおっ♡♡♡♡ このおちんぼっ♡♡ 太くてっ♡♡♡ 素敵いっ♡♡♡♡」

蕩けきった顔で涎を垂らし、舌を突き出して喘ぐ様は普段の飄々とした態度からは想像もできないほど卑猥である。これが塩見周子だと誰が思うだろうか。アイドル時代のファンが見たら卒倒してしまうかもしれないほどの淫乱ぶりだ。

「おちんぼ、いいよおっ♡ ごりごりって、おとーちゃんのおちんぼに、おまんこ抉られてえっ♡ きもち良すぎてっ……あっ♡ んあっ♡ ああっ♡ らめらめらめっ♡ 腰止まらなひっ♡」

周子は獣のような嬌声を上げながら腰を振り乱す。ぽっくり開いた割れ目から本気汁が噴き出していた。それはピストン運動に合わせて飛沫となり周囲に飛び散っていく。

「イクッ♡ イグウッ♡ イックうううっ♡♡♡♡」

絶叫しながら達する周子に呼応するように膣内で肉棒が大きく脈打った。直後、濃厚な精液が大量に発射される。どびゅっ、びゅるるると音が聞こえてきそうなほど大量の白濁液が注ぎ込まれた。

射精は一度では終わらない。二度三度と脈動し、その度に粘っこいザーメンをぶちまけられた。熱い奔流を受け止めて周子は絶頂を繰り返す。背中を大きく仰げ反らせて痙攣し、声にならない声を上げた。

長い吐精が終わると今度はゆっくりした動きで前後に動かされた。射精した精液を肉壁の一枚、一枚に塗り込み、隅々まで自分の臭いに染めるための動きだ。

やがて満足したのか、ようやく義父の陰茎が引き抜かれる。栓を失った秘裂からはドロリと白い液体が流れ出てきた。並の男であればこれだけ射精すればしばらくは勃たないだろう。しかし義父は並の男ではないし、彼の前にいるのは塩見周子なのだ。

ドッグスタイルでの激しい抽送でぐったりしてる周子の汗に濡れた身体や、いった直後のアンニュイな表情を見ていると義父のちんぼは休む間もなく勃起した。

一度や二度の射精など彼にとってはウォーミングアップにすぎない。まだまだこれからだと言わんばかり。再び臨戦態勢を整えた義父を見て、周

子も嬉しそうに微笑んだ。

(えへへ、まだ元気みたいやね)

周子が期待を込めた眼差しを向ける中、義父は次の体位へと移る。仰向けになった彼の上に跨るようにして周子が乗った。いわゆる騎乗位。

義父の腹に手をつけて、ゆっくりと腰を下ろしていく。固く張り詰めた亀頭が入口に触れたかと思うとそのまま一気に奥まで貫いた。ずぷぷっと卑猥な音を立てて根元まで埋まり込む。

「ふああああっ♡♡♡♡♡」

歓喜の声が上がる。お腹の中を隙間なく満たされる充足感があった。そしてすぐに彼女は自分から動き出す。自ら尻を振りたくって上下に揺さぶった。

「んっ♡ あはっ♡ おとーちゃんのおちんぼ♡ おっきくて♡ 気持ちいい♡ あっ♡ はっ♡」

ぱんっぱんっとな乾いた音と湿った音が混じり合う。肉と肉のぶつかり合いだ。結合部からは先ほど出されたばかりの精子が溢れ出して泡立っていた。白く濁った粘液が陰毛に絡みつく。それが潤滑油となってさらに動きが滑らかになっていく。

「おっ、ああっ、くはっ、すっ、すごっ、腰、うごいてるっ あんっ これえ 気持ちいいっ きもちいいよおっ」

喘ぎながらも周子は貪欲に快楽を求めた。腰をくねらせて更なる快楽を得ようとする。その動きに合わせて義父もまた下から突き上げた。子宮口を突き破るような勢いのある一撃を受けて、周子のしなやかな背筋が仰け反る。女性らしい曲線美が強調された。

周子の体内は電流が走ったように痺れる。目の前がチカチカとして意識が飛びそうになった。それでも身体は本能に従って動く。もっともっと気持ち良くなりたいと腰が勝手に動いてしまう。

義父の動きは力強いが決して力任せではない。あの夜以来のセックスでも、しっかり周子好い部分を覚えていた。急激に上昇する快楽に、周子は全身の毛穴が開くのが分かった。

そうして二人は互いの身体を貪りあう。いつしかふたりとも理性をなくし、動物のように交わった。

「あっ、うっ、あ、あああっ！ うっ、ふあっ！ んんっ……す、凄いよお！ おとーちゃんの……おっ、壮汰さんのおちんぼ……いいよお♡」

狂乱の宴の中で周子は義父を名前では呼ぶようになっていた。それは彼女

が三十も離れた義理の父親をひとりの男の人として受け入れ、愛する変化と覚悟の表れだった。

「周子っ！ 周子おっ！」

対する義父——壮汰も彼女の名前を呼び、夢中で腰を振った。泥酔した状態で襲ったときは最後まで元妻の名前を読んでいたが、今宵は素面で自分が誰を抱いているのか理解したまま犯す。

息子の嫁に手を出すなど本来あってはならないこと。仁義に反する。だがしかし、たとえ畜生道に堕ち果てることになろうとも、今夜ここで周子を抱かない選択はなかった。

息子に裏切られ細い肩を震わせている彼女を独りはしておけなかった。思わず背後から抱きついてしまった。この女を幸せにしてやれるのはワシだけなんだという思い……あるいは思い上がりか……が壮汰を突き動かした。

だから彼は遠慮しない。むしろ今まで我慢していた分を取り戻すかのように全力で抱く。

もちろん息子に対して罪悪感はある。父親失格だという自責の念もある。元妻を寝取って一緒に消えた男と同じことをしてるじゃないかと言われれば何も言い返せない。まんまと若い女の心の隙間に入り込んで、お愉しみに持ち込んだなど口さがない人間は言うだろう。

そんなことに一々取り合うつもりも釈明するつもりもない。知らない連中の勝手な品評より壮汰には、今このとき周子を慰めてやることのほうが遥かに大切だった。

だから止まらない。止められない。止まるつもりもない。今夜はこのまま朝まで彼女を抱き続けるつもりだ。それを止める権利があるとすれば、今晚ここに帰って来ない夫だけだ。

「ああっ♡ そーたさん♡ そーたさん好き♡ しゅきい♡ このおちんぼしゅきいいいい♡♡♡」

何度も絶頂を迎えて、もう呂律も回らないほどイキ狂った末に、周子は好き以外の言葉が言えなくなる。自分への好意を百パーセント全開にして向けてくる若妻に壮汰も愛おしさが止まらない。

「ワシも好きだぞ周子。いっぱい愛してやるからな。あいつが放っておいた分ワシが大事にしてやる」

「しゅきしゅきしゅきいい♡♡♡ しゅきしゅきしゅきしゅきいい

っ♡♡♡」

もはや完全にタガが外れてしまった周子は乱れながら壮汰を求める。それに応えるべく壮汰はさらに激しく動いた。

「ひああっ！ ああッ！ あああああ……ッ！ 壮汰さあん、激シッ！

ああ！ んあああッ！ ふいひひ♡♡♡ いひひひ♡♡♡ らめ、らめ♡ 壊れるッこわれる♡ 壊れるから♡ 壊れちゃうのおお♡♡♡ こんなすごいのをされたことないひひ♡♡♡」

ロデオのように暴れる壮汰の腰。振り落とされまいと周子は義父の胸に爪を立て、ガリガリ引っ掻きながら肉棒を膣奥に咥え込んだままヘコヘコと尻を揺らす。彼女の痴態を前にして壮汰はますます興奮を高めていく。男根から伝わる刺激と相まってどんどん射精感が高まった。

「はあっ、はあっ！ はっ、はっ、はっ、はっ、はひっ？ イ、イクそうっ？ イク？ イクなら、イクならっ、一緒に、いいっ！ 一緒にあ！」
「くっ……ふう……いいぞ、そろそろ出すぞ……一緒だ……一緒にイクぞ周子！ これからもワシと一緒にだ。ワシと一緒にいてやるからな」

限界が近いことを知った周子が潤んだ瞳で訴えかける。それに答える壮汰。ふたりは同時に絶頂へ至ろうとしていた。

「出してえ♡ 中に入れて♡♡ 壮汰さんの精子、ちょうだい♡」

「ああ、全部受け止める……！」

壮汰はラストスパートをかけた。最後の力を振り絞って下から上へと突き動かす。

そのたびに肉襞を擦り上げられ周子も快感の頂点に達しようとしていた。卑猥な腰のグラインドはますます激しくなる。

膣奥にある敏感な部分へ狙い澄ました一撃を打ち込むと、反射的に周子の蜜壺がうねり狂いながら締めつけてきた。肉棒全体が圧迫される。その刺激が壮汰を絶頂に追い込んだ。

「アッアッ——イクっ——あっあっあっあっあっイクッ」

壮汰の男根が大きく脈打ち大量の精液を吐き出すと同時に、周子も背中を大きく仰け反らせて達した。

「イクっうううっ♡♡♡♡♡」

大きく目を見開き舌を突き出しながら、まるで獣の咆哮のような嬌声を上げる。ガクガク痙攣する身体に合わせて秘裂からも愛液が吹き出した。結合部から溢れた精液が滝のようにこぼれ落ちる。

ぐったりと脱力するふたり。汗まみれの身体を寄せ合いながら荒い息を

吐く。壮汰の男根はまだ衰えることなく硬度を保っていたが、息も絶え絶えな周子に無理をさせるわけにはいかない。名残惜しく思いながら休憩を挟むことにした。

自分で身体を支えられず倒れ込んできた周子を壮汰が受け止める。

まだ余韻に浸っているのかぼうっとしたままの周子の頭を撫でてやると、彼女は嬉しそうに微笑んだ。そのまま甘えるように胸に頬ずりしてくる。

そんな仕草に年甲斐もなく胸が高鳴るのを感じた。改めて実感するがやはり美人だ。全国から容姿に自信ある人間が集まってくる芸能界という名の魔窟。そこで成功するためには単に見目形がよいだけではなく、大衆を惹きつけ自分に夢中にさせる華がなくてはならない。

かつての周子もそんな世界で生き抜き、数多の屍の上に築かれたステージで華々しく活躍するアイドルだった。だから当然なのだ。こうして至近距離で見ると目が離せないほどの美人で、凝視していると緊張して背筋が引き攣ってくるのは。

それからしばらくしてようやく落ち着いたらしい周子が顔を上げた。その瞳にはまだ欲情の色が浮かんでおり、壮汰の下半身は否応なく反応してしまう。それを見た彼女は妖艶な笑みを浮かべるのだった。

あの気まぜい電話から月日は飛ぶように過ぎて数ヶ月。季節も二回変わった。プロデューサーは久しぶりに我が家へと帰って来た。もっと早くに帰ろうと思えば機会はあったが、帰って例の件を問い詰められたら何て返せばいいんだろうと考えて足が遠のいてしまった。

仕事を理由に担当アイドルの様々な現場について行った。上司からは「君ももう人を使う立場なんだからなんでも自分でやろうとするのはやめて、部下に任せることを覚えなさい」と言われた。まさか家に帰りたくないから泊まりがけの仕事の方がありがたいんですとは言えなかった。

過ちは一回だけだった、あの夜は周子との電話で我に返りなにもなかった、それ以後もない。そんな言葉がなにかの申し開きになるだろうか。ならないだろうな。この手の話が回数の問題でないことくらい分かる。

ドアの前で三回、四回と深呼吸してから玄関の鍵を開けた。玄関には周子の靴一足だけ。父親は出かけている最中だろうか。

「おっ！ お帰り～、こうやって顔合わせの久しぶりだね～」

キッチンの方からエプロンを身に着けた周子がのんびり出迎えにくる。

どんな罵声や非難めいた冷たい視線が投げ掛けられるかとヒヤヒヤしていたプロデューサーは、のほほんとした周子の態度で逆に面食らった。

「あっ、ああ……ただいま……周子どうしたんだ、その髪の毛」

プロデューサーは久しぶりに顔を合わせた妻の変化に気づいた。いや、さすがにこれに気づかなければ離婚ものだろう。周子はトレードマークだった銀髪を黒く染め、長さも首筋が隠れる程度のミディアムヘアまで伸ばしていた。

「思い切って染めなおしてみたんだ。どう？ 似合う？ 大和撫子ってかんじ〜？」

「あっ、ああ……すごく似合っていると思うぞ……本当に、綺麗だよ……」

妙にドギマギしてしまったのは周子が綺麗に見えたからだ。何をか言わんや元から周子は超が付く美人だろうと言われればプロデューサーにも異論はないのだが、アイドル時代まで思い返してみても今が周子の全盛期ではないかと感じるほど彼女は輝いて見えた。

仕事柄様々な女性と顔を合わせ、時には誘惑されたりもするプロデューサーは、いやらしい意味でなく女を見る目が肥えていると自負していた。その彼をして今日の周子は芸能界でもなかなか見ない美女だぞと感じた。

周子の変化でプロデューサーの目についたのは表情が明るくなったことだ。思えば自分と結婚してからの周子は、夫婦感のすれ違いもあって以前に比べ影のある顔をするようになった。そうした翳りが見られない。

(こんな風に屈託なく笑う周子を見たのはいつ以来だろう)

「あれ？ そんなピアス持ってたっけ」

プロデューサーは周子の耳元で光る見覚えがないピアスに目を留めた。(まあ、おしゃれ好きな周子のことだし、何ヶ月も離れてればピアスのひとつやふたつ増えてるか)

沈黙が怖くて何の気なしに振った話題だったが、思いのほか周子はテンション高く返してきた。

「あっ！ これ〜？ いいでしょ〜！ おとーちゃんが買ってくれたんだ！」

そう言って周子は愛おしそうに右手でピアスを撫でる。左手の薬指に嵌められた指輪よりも大切にしているように見えた。

「そうなんだ……あの親父が、女の子にプレゼントをね……へえ〜」

プロデューサーから見ても父親の壮汰は良く言えば豪放磊落、悪く言えば大雑把で異性にチマチマした装身具をプレゼントする人間ではない。子

供時代を思い返してみても、母親が結婚指輪以外で父親からその手の品物を贈られていた記憶がなかった。

だから父親からのプレゼントと聞き、プロデューサーは少し訝しんだ。(あの大雑把な親父がプレゼント？ それも義娘に？ 意味わかってんのかな？ 親しい女性に贈るようなもんだぞ)

逆に細かいことを気にしない性分だからこそ普段の感謝を込めて贈ったのかもしれない、そうに違いないとプロデューサーは己の違和感を納得させた。

「気に入ってるんだな」

「うん。これはあたしの宝物なんだ♪」

周子とプロデューサーはリビングのテーブルを挟んで差し向かいになって座った。お互い話したいことは山積みで、この数ヶ月に起きた出来事を交互に語っていった。プロデューサーが長らく家を開けたと謝ると、周子は仕事で忙しかったんだから仕方ないと逆に労ってくれた。

あまりにも自分の不在を気にしてなさすぎる周子の態度に、プロデューサーは「この家にもうお前は必要ない」と言われてる気がした。

(考えすぎだよな。被害妄想ってやつだ。きっと罪悪感が良からぬ考えを呼ぶんだ)

積もる話に花を咲かせていると玄関から「ただいま」という声が出た。

「あっ！ 帰ってきたっ！」

そう言う周子は嬉しそうに立ち上がって玄関の方へ小走り。その姿は主人の足音を聞きつけて玄関ダッシュする飼い犬のようだった。

「おかえり～ん。ありがとね～買い物任せちゃって」

「ははっ！ これくらいお安い御用だよ。いつでも頼ってくれ」

「ありがと～～♪」

「おっ？ この靴はあいつか。今日は予定どおり帰ってきたんだな」

楽しげな会話がスリッパの足音ともに近づいて来る。間もなくリビングに姿を現した父親は、プロデューサーの記憶にあるものからかけ離れていた。

以前の父親は見た目に頓着せず、何年前に買ったか分からないヨレヨレのTシャツを着古していた。それなのに数カ月ぶりに対面した彼は何かのファッション誌から飛び出してきたようなイケオジになっていた。パリッとしたシャツにネクタイ、カーディガンを自然に着こなしたスタイルは、厚い胸板を持つ彼の体型にも似合っていた。

メンズファッションにおいて背が高く筋肉もあるというのは、それだけで素材勝ちなんだなと思わされてしまう。

いわゆるマネキン買いのような感じがしないのは、父親の代わりにセンスある人物が彼個人に合わせてコーディネートしてあげたからだろう。その人物が誰かは考えるまでもなかった。

「おおっ！ 久しぶりだな！ 元気だったか？」

久しぶりに会う父親は相変わらず声がデカかった。数カ月ぶりに息子と会うので喜んでくれてるのかもしれない。

「ああ、久しぶり……なんていうか……親父、しばらく見ないうちに垢抜けたな」

「ふふ～ん、いいでしょ～このコーデ」

プロデューサーが困惑気味に問いかけると、壮汰の後からついて来た周子が彼に腕を絡ませながら得意満面で言った。

「シューコちゃんが直々にプロデュースしたんだ～。前々から、おとちゃんは素材がいいのにもったいないな一、もっとファッションに興味を持てば変わるのにと思ってたんだよねー」

服だけではない。周子は自分も行きつけの美容院に壮汰を連れて行き髪や髭も綺麗に整えさせていた。人間の第一印象は髪型でだいぶ変わると言われるが、確かに千円カットで「邪魔だからとにかく短く」と切ってもらい、以後は数ヶ月伸ばしっぱなしでボサボサになったころ千円札だけ握りしめて出かけて行ったころとは大違い。

「このネクタイは周子ちゃんを買ってくれた物でな、特にお気に入りなんだ」

そう言って少年のようににはかみながら壮汰はネクタイを撫で回す。

「そんなこと言って～。なにも出ないぞ～？ このこの～」

周子に脇腹を突かれた壮汰がくすぐったそうに身を振る。

(なんだこれは……？)

妻と父親のイチャつきを見せられてるプロデューサーの胸に言い知れぬ不安が去来した。

ふたりはまるで幸せな夫婦だった。恋人時代や新婚時代の自分たちよりも仲睦まじく見える。お互いを尊重し合い慈しみ合っている男女の姿だ。(俺の留守中になにがあったっていうんだよ……これじゃ俺がいない方がよかったみたいじゃないか……)

ふたりの醸す幸せオーラに当てられてしまい、居心地の悪さを感じたプ

ロデューサーは席を外したくなった。ここに自分の居場所はない。己の家ののに直感的にそう感じてしまった。これまでの人生で感じたことがないほどの疎外感に胸が締め付けられた。

するとそれを察したのか、周子と壮汰が心配そうにこちらを見てくる。「どーしたん？ どっか具合悪いの？」

「疲れてるんじゃないか。ずっと働き詰めだったんだろ」

「なんでもないよ」

プロデューサーは強がりの笑顔を浮かべた。

夫婦は似てくると言うが、今の周子と壮汰の身振りも鏡写しのようだ。これがもし周子と自分だったら、ここまでシンクロしたのだろうか。

(なにを馬鹿なことを！ なにもあるはずないだろ。相手は俺の親父なんだぞ。歳だって三十は離れてる。いくら見た目を着飾ったからって周子からしたら自分の父親とセックスするようなもんじゃないか)

芸能界に身を置く人間でありながらプロデューサーは、芸能ニュースで時たま流れる年の差婚の話題をすっかり頭から締め出してしまった。芸能人ならいざ知らず自分の父親のような平凡な親父が周子のような、不倫するに仕たっていくらでも相手選び放題の美女と、と現実的な判断をしてしまった。

まだしもアイドル時代に知り合った芸能人と言われたほうが飲み込める。

しかしながら、男女の仲は時として現実的な思考などという逃げ口上で考えることを放棄した人間にはたどり着けない結末に至る。

「よ～し、ご飯もできてるし、おとーちゃんもお酒を買ってきてくれたし、そろそろ夕食にしましょ～。シューコちゃんおなかすいた～」

「ああ、ワシも腹が減ってきたよ。夕餉でも囲みながら話を聞かせてくれ。久しぶりにお前と飲めるのを楽しみにしていたんだ」

プロデューサーはふたりの笑顔の裏に秘密を抱えた人間の後ろめたさを見つけようとした。しかし、いくら目を凝らしてもその兆候は見られなかった。

(そうだよ、考えすぎなんだよ、自分に秘密があるから相手も同じはずだと疑心暗鬼に陥ってしまうんだよな)

大丈夫だ、なにも問題ない、俺さえしっかりしてればいいんだとプロデューサーは自分に言い聞かす。

久しぶりに全員揃った食卓で三人は幸せな一時を過ごした。

幕間

ベッドの端に腰掛ける周子は背後から腕を回してくる義父の胸に凭れ掛かる。好きにすると彼に身を預ける意思表示だ。

壮汰の指は無骨な見た目に反し繊細なタッチで女体を撫で回す。彼の優しさや思いやり、気遣いが表れたような前戯が周子は好きだった。もちろんセックスのクライマックスはおちんぼを挿れてもらうことだし、周子だってそれを愉しみに抱かれているのだが、壮汰とのセックスはそこへ至るまでの触れ合い一つひとつが彼女を昂ぶらせた。

おっぱいやおまんこのような分かりやすい性感帯を触られたときだけではない。二の腕を撫でただけで鳥肌が立つほどの快感に襲われる。肩に手を添えられ、うなじに彼の吐息を感じただけで下腹部が熱くなった。そこに本来なら夫に使ってもらう臓器が——夫婦の愛の結晶を育むための場所があるのかと意識してしまうと、その自己主張の強さに周子は陶然としてしまう。

二十三歳。女性の生殖能力において申し分ない時期と言えた。

「ああ♡」

首筋にキスされて切ない息が漏れる。彼は何度も同じ場所へのキスを繰り返した。

(おとーちゃんったら長い髪が好きって言っちゃったのを気にしてるんだ。可愛い)

好きなヘアスタイルに周子とは真逆の黒髪ロングを挙げた義父。自身の失言を未だに引きずっているようだ。頸部が剥き出しになった利点を活かすように首筋への口唇愛撫を続けた。

壮汰の唇がフルーツでも吹くように周子の首筋を這い回る。彼のキスは顎周り、頬と上がってきた唇に達した。周子は首を巡らせて背後の男と唇を重ねる。

「ちゅっ……んふうっ♡ ふちゅう……ちゅくっ……」

舌先同士が絡み合う。最初から深いキスを受け入れる。大きなリップ音を響かせ互いを求め合った。ディープキスの最中に唇を吸われると腰砕けになってしまうほど気持ちいい。脳髓へ直送される快感に腰が震えた。

舌の上に唾液を塗りたくるように舌を往復させる。口内粘膜同士の摩擦で生まれる官能的な痺れ。一方的に蹂躪されるだけでなく、こちらからも啜ってやるとより気持ちよくなる。もっと刺激が欲しいという欲望に駆られ、相手の口腔内に侵入していく。歯茎の裏側を舐め上げれば、同じよ

うにしてやり返される。互いの口の中を掻き混ぜながら、より深く繋がろうと密着度を増していった。

もうどちらのものか判別できない涎を飲み込みながら舌を絡め続ける。

ねっとりとした体液交換をしている最中に、下着をつけていない乳房が直接掴まれる。

(んんっ……はぁ……♡)

壮汰は手の動きに合わせて形が変わる胸の感触を楽しんでいるようだ。下から持ち上げるようにして大きく周子の胸乳を動かす。五本の指が肉穂を押し潰すたびに彼女の口からくぐもった喘ぎが漏れた。

手のひらで乳首を転がされると甘い感覚が背筋を震わせた。鋭敏になった乳首は、わずかな快樂をも増幅させて受け取るのだ。

(あっあっあっ！ いいっ！ おとーちゃん上手すぎる！)

胸を揉んだまま親指だけが器用に動いて先端を刺激する。円を描くような動きで小さな突起を撫で回された。自分で触っているときは違う感覚に襲われて喘ぎ声を漏らす。焦らすような動きに腰をくねらせてしまう。それが更なる悦びを生むことに彼女は気づいていないのだろう。だが気づいたとしても本能を抑え込むことはできないはずだ。なぜなら女の肉体に宿る雌としての性が、最も強い衝動だからだ。

(もうダメ！ そんなんされたら我慢できなくなるっ！)

壮汰の丸太のような腕が自分を抱きすくめている。その気になれば女の細身などプチャッと潰してしまえそうな逞しい肉体。この感触だ。男の人に抱かれる幸福感。自分より強い生物に包まれる安堵。プロデューサーとの結婚生活で忘れていたことだ。

(ああーっ！　なんでなんでなんでえっ？　なんでこんな気持ちいいーんっ？)

男の筋肉に包まれた身体はそれだけで心地よかった。背中越しに彼の体温を感じると多幸福感が湧き上がってくる。周子は子宮から愛液が溢れてくるのが分かった。股間が熱い蜜で濡れそぼっていく。

「あん……はぁん……」

「気持ちよくなってきたのか？」

「うん……♡」

素直に頷くと壮汰は満足げな表情を浮かべた。

彼に弄られた乳首は充血し、一回り大きくなっていた。固く凝った肉の蕾を指で摘ままれると電流が流れたみたいに背筋が反り返った。反射的に

口をついて出た声は自分でも驚くほど甘ったるいものだった。

「あんっ！」

咄嗟に口元を手で押さえるも遅い。自分の嬌声を聞いたことで、余計に恥ずかしさが込み上げてきた。

耳まで真っ赤に染め上げた顔を俯かせる周子に対し、壮汰は言った。

「相変わらず周子ちゃんは可愛い声を出すな」

そう言ってベッドに寝かされる。仰向けの周子に壮汰は添い寝するようなポジションを取る。だが一緒に仲良くお手々繋いで寝ましょうなんて生ぬるいスキンシップで負われるはずがない。

彼の手で両脚を大きく開かされた。なにも身に着けてない股ぐらが無防備にさらされる。

「ほ～ら御開帳。周子ちゃんの濡れ具合はっ」と

壮汰の指先が周子の薄い陰毛を撫で擦りながら割れ目に伸びてくる。

「ひゃうっ？」

クリトリスに触れた瞬間、全身がピクッと痙攣した。そこを軽く撫でられただけで凄まじい快感が走る。

(ああっ……そんなとこ……そんなにされると)

皮の上からクニクニと揉まれただけで周子は物欲しげに腰がくねるのを止められない。敏感な突起を親指でこねくり回されながら、別な指は膣穴の中に入ってくる。ぬぷっ……と音を立てて中指の第一関節まで挿入られる。

周子の膣内は恥ずかしいほど濡れていた。

そのまま指先を折り曲げてGスポットを引っ搔かれたとき、頭の中で白い閃光がスパークするのを感じた。

(あああああ～っ♡♡♡)

膣内でも特に敏感な箇所をピンポイントとに責められると、膣内の潤みが増していくのが分かる。髪ヒダが収縮を繰り返して雄を迎え入れようと蠢く。そのたびにトプトプと新たな愛液が追加された。

彼の指の動きが激しくなり、ぐちゅぐちゅと卑猥な音が室内に響く。おまんこは口ほどに物を言う。壮汰の愛撫で悦んでいる証拠の淫らな水音が、自分の下肢から聞こえてくる事実により周子は白い肌を全身ピンク色に染めた。

「よし、ほぐれてきたぞ。もう少し頑張ってみようか」

指を挿入したまま壮汰が言った。秘裂を出入りする指使いに遠慮がなく

なっていく。

初めは浅く出入りしていた彼の指に力が籠められ、次第にスピードが上がる。そして同時に人差し指も追加して二本指での責めが始まった。指が出し入れされるたび、ぐちゅぐちゅといやらしい音を立てる。壮汰は二本の指先を揃えて上向きにして突き上げた。まるでドリルのように回転しながら抽送を繰り返す。

その動きに合わせるように周子が喘ぐ。男に翻られながら歓喜の歌を歌う気持ちよさに目覚めた女の甘えた声だった。

巧みな指遣いに翻弄されて女体が歓びに打ち震える。

いつの間にか三本に増えた指先がバラバラに周子の弱点を責める。彼女は一度目の絶頂を迎えようとしていた。

こんな簡単かつ一方的にイキそうになっている自分が信じられなかった。プロデューサーとのセックスでは、むしろ周子のほうが飄々と彼を責めるまでであったのに。

だけどそれ以上に快楽を求める欲望のほうが勝っていた。女の身体は男と違って何度だって達することができるのだ。体力が続く限り何度でもアクメを迎えることができるのだ。

だからもっとしてほしい。イキたい、イカせてほしい。周子は自分から腰を浮かせて快楽を得ようとする。しかし壮汰はそれを許そうとしない。むしろわざとペースを落として焦らすようにしてくるのだ。

「ほらどうした？ そろそろイクか？ イっちゃうのか？」

「やあぁっ……いやっ♡ いやっ♡ いじわるせんといてえ♡ 壮汰さんのい・け・ず♡」

涙目になっていやいやをする娘に父は言った。

「周子ちゃんのような美人さんをイジメたくなるのは男の性だよ……分かるよね、イカせて欲しかったらなんて言うか」

「お……お願いやから……おちんぼくください……壮汰さんの極太おちんぼ挿れてください♡」

「よしよし、いい子だ」

義父は満足そうに顔いて周子の秘部から指を抜いた。ぬぼっと音がして引き抜かれた指からは、粘度の高い糸が搦きたての餅のように伸びている。ホカホカと湯気が立つネバネバを壮汰は、周子の顔の前まで持っていった。ピースするように指を開くと間にマン汁ブリッジが掛かる。周子はそれをうっとり眺めたあと、舌を突き出して舐めとった。酸性の風味

が口の中に広がる。決して美味しくはないが彼の指を綺麗にするため丁寧に舐め取った。

その仕草を見た壮汰が目を細める。満足げに笑った後、彼は周子の脚の間に身体を割り込ませてきた。

壮汰の腰では赤黒く変色した亀頭が天を衝いている。カリ首はくっきりと段差ができており、竿全体にも太い血管が浮き出していた。ピキピキと擬音が聞こえてきそうなほど肉は張り詰めている。

グロテスクだが圧倒的な迫力を誇るペニスだった。これがこれから自分の中に入るのだと思うと、自然と身体が火照ってくる。もう何度も受け入れ、どれだけ気持ちよくなってしまおうか覚え込まされた。

「さあ挿れるよ」

先端が濡れた割れ目にあてがわれる。にちゃっと音を立てて、亀頭と陰唇が触れ合う。

周子はゴクリと生唾を飲み込んだ。

壮汰は周子を気遣いゆっくりと腰を落としてくる。彼の肉棒が自分の中に入り込んでくる感覚に、つい「んっ……んくっ」と鼻にかかった声を漏らしてしまう。

ずぶ、ずぶずぶ、ぬぼっと陰唇を掻き分けて亀頭がめり込んでくる。太いところが通ってしまえばあとは一気にゴールまで突き進んだ。

「おっ……おお……いいぞ……これは凄いな……いつもより締まってるぞ」

「そ……そんなん知らんわ……」

憎まれ口を叩いても頬が真っ赤に染まっているせいで説得力がない。壮汰はニヤニヤ笑いながら「そうか？ じゃあ確かめてみよう」と言うといきなりピストンを開始した。最初から激しい動きで子宮口を小突かれる。パンパンと肉のぶつかり合う音が部屋に響く。膣奥をノックされると一瞬で周子の本能は白旗を揚げた。

(あかん！ もうアカンよ！ こんな我慢できるわけないやん！)

壮汰に抱かれたくて抱かれたくて仕方なかった周子の膣内は、簡単な前戯だけでドロドロに蕩けて潤滑剤をたっぷり分泌していた。抜群の滑り具合は周子の予想も超えた滑り具合で義父の巨根を最深部まで招き入れた。

(無理っ！ 気持ち良すぎるっ！ ああっ！ すごっ！ なにこれ？ やばいって……ほんとに！ 死ぬっ！ 死んじゃうっ！ こんなんされたら死んでしまうううううう)

心の中で絶叫を上げる周子に構わず、壮汰は容赦なく腰を振り続ける。

ズドン、ドスン、ズバンッ、ヌポッ、グチュッ、ジュポォッ！

結合部から下品な音が響く。その音に合わせて周子の嬌声があがる。

「……んああああっ！ ダメっ、はげしっ……んんっ……だめえええっっ！」

官能の支配下に置かれた雌の喘ぎ声が部屋の中に響き渡る。

「むりっ、むりっ、むりっ、いくっ、いくっ！ いくっ！ いくの止まないっ！」

強烈な快感が脳天まで突き抜けた。これまでの壮汰との行為を思い出しでも一番と思われる大きな快楽は、神経のリミットを振り切ってしまうのではないかと恐怖さえ与えた。それはあまりにも暴力的で、それでいて心地よい麻薬のようなものだった。

周子は絶頂に達した。オーガズムを迎えた瞬間から意識が真っ白に染まり、何も考えられない。頭がバカになるくらいの快感というのはこういうことを言うのだろう。しかもこの快感は一度ではない。連続して絶頂を迎えていたのだ。そのたびに頭の中が爆発しそうになる。気が狂いそうだった。

「すごいのお、すごいっ、すごいのが終わらない、いっちゃう！ あっ、あっ、あっ！」

彼女の身体は無意識のうちに痙攣していた。手足に力が入らず全身が小刻みに震えている。

そんな有様でも彼女は懸命に意識を繋ぎとめようと努力していた。歯を食い縛りシーツを掴んで耐えようとする。

壮汰が休まず腰を動かし続けていては無駄だと悟るのにそれほど時間はかからなかった。

ずりゅ、ずりゅずりゅと陰茎が膣壁を摩擦する。大きく張り出したエラが内部のヒダヒダを引っ掻き回す。周子の華奢な身体にはオーバーサイズの男根であるにもかかわらず、止め処なく溢れる潤滑剤のおかげで抽送はスムーズに行われた。

長くプロデューサーに放っておかれて眠っていた女の喜びを感じるための神経が、繰り返してきた義父とのセックスで目覚めたのかもしれない。それは、この身体の新たな所有者が目の前の中年男になったということだ。

(こんな大きいおちんぼでガンガン突かれたら、他の男となんてできなく

なるに決まってるやん……あ～あ、もうこれでうちのおまんこ完全におとーちゃん専用になっちゃったなあ……まあいっか♡ おとーちゃんのおちんぼ最高に気持ちいいもん♡)

快楽に浸りきっていたところに壮汰が言った。

「よし、出すぞ。しっかり受け止めるよ」

ラストスパートとばかり激しく腰を動かされる。パン、パンッと肉を打つ乾いた音と、くちゅっ、ちゅぶっという卑猥な水音が入り混じって聞こえた。本気汁が掻き混ぜられ白く泡立ったものが接合部から漏れだす。

周子は全身がじんじん痺れ、身も世もなく身体を振って喜悦の荒波に耐えた。

全身の毛穴が開き汗が噴き出てくる。心拍数が無限に上昇し、呼吸が乱れる。

「あああああああっ！ あっ！ あああああっ！ またっ、いぐっ、いぐううっ！ イッちゃうううううううううっ！」

ひときわ大きな声で叫ぶと周子は、身体を弓なりに反らしてガクガクガクッと全身を震えさせた。それからぐったりとベッドに沈み込む。

周子は肩で息をしながらぼんやりと天井を眺めた。額に滲んだ汗で髪が張り付いている。それがとても気持ち悪い。だけど拭う気力もないほどに体力を使い果たしていた。

そんな彼女を労うように壮汰の手が頭を撫でてくれた。大きな手の優しい感触はとても気持ちがいい。

まるで猫にでもなったような気分だった。思わず喉がゴロゴロ鳴ってしまいそう。そのくらい気持ちよくて幸せだ。

(ほんま優しい人なんやから♡)

うっとり目を閉じていると、唇の端に柔らかい感触が当たった。目を開けると壮汰の顔が見える。彼はキスしようとしてくれたらしいのだが、微妙に狙いを外したようだ。ひょっとすると直前で事後に労いのキスなんてキザで恥ずかしいと考えたのかもしれない。

(もぉ、そこは普通口にちゅーするところやろ？ しょうがない人♡)

クスリと笑い周子は自分から唇を押し当てる。舌を伸ばして唇を舐めていると侵入を許された。すぐにお互いの舌が絡み合う。ふたりの口の中では二枚の舌が生き物のように動き回り、淫らな音を立てる。

「またしたい？」

唇を離すと周子が聞いた。

壮汰は少し考える素振りを見せた後「ワシはいいけど、周子ちゃんは少し休んだほうがいいんじゃないか」と言った。

「そうだね～。誰かさんがガンガン激しくするから疲れたかも」

「すまんかった」

本気で申し訳無さそうな顔をする義父を見て苦笑すると、周子は甘えるように言った。

「だから……抱っこしてほしいな♡」

両手を伸ばし甘えた声を出すと義父はすぐに反応してくれる。

「はいはい」と言って義父は抱き起こした周子を膝の上に乗せる。そのままギュッと抱きしめてくれた。

「はぁ……あったかい……♡」

温もりに包まれてホッと息を吐いた。そして少し眠くなる。臉が落ちそうになるのを我慢していると、義父の指が髪に触れた。彼の指に髪を梳かれながら眠くなる。

「少し伸びてきたね」

「すぐに紗枝はんのような黒髪ロングヘアーというわけにはいかないけど、ちょっとずつおとーちゃんの理想に近づくから待っててね」

「ワシは……周子ちゃんなら、このままでいいと思うよ……」

眠気のせいで思考がまとまらない。何を言われたのか理解できなかったが、髪を撫でてくれる手が心地よいので気にしないことにした。もっと撫でてほしくて頭を擦りつけるように動かす。そうすると彼の手のひらが頭をすっぽり包み込み撫でてくれる。嬉しい。幸福感に包まれたまま周子の意識はゆっくりと闇に落ちていった。